

---

# 普通の現代人が幻想入り

さっきゅん@瀟洒なメイド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

普通の現代人が幻想入り

### 【Zコード】

Z8802X

### 【作者名】

さつきゅん@瀟洒なメイド

### 【あらすじ】

普通の現代人、霧雨悶助は霧雨魔理沙と言う妹を無くし（幻想入りのせいで）、両親も離婚し、母にも捨てられた。

施設に預けられ、平凡に生活していた彼の日常は、やがて妹と同じ世界へ行きそして生活を送ることとなる…

これから展開でハーレムあります。  
主人公強設定です。

以上の二つが嫌な方は閲覧をご遠慮下さい。

## 1話「記憶」（前書き）

オリキヤラが含まれてます。これから的发展でハーレムとかもあるかもしません。

主人公強設定。人間を軽く超えたレベルですね。人間だけれど人間卒業。

上記の設定が嫌いな方は、閲覧をご遠慮下さい。

## 1話「記憶」

PM22:45

2008年12月17日。

特別な日でも無く、夜の岡谷市を歩いていた。

俺の名前は、霧雨悶助。名前？ああ、作者のネーミングセンスが無いから仕方ない。

住んでるところは長野県岡谷市にある施設。

俺には妹が居た。

霧雨なんだっけ…下の名前は忘れてしました。

妹は、ある晴れた朝に遠足のバッグを残して姿を消した。  
親は警察に連絡して妹を探して貰つたのだが…

日本中のどこを探しても見つからず、妹は死亡したとされたのだ。

それ以来、両親は変わった。

父と母は毎日のように喧嘩し、俺は怯えながらも幼少期を過ごした  
ものだ。

結果、俺が7歳の時に両親は離婚。

母に引き取られたが、すぐ捨てられて1ヶ月公園で過ごした。

まあ、公園での生活は食べ物以外では苦労しなかつたからな。其処までつて訳でもなかつたし。

警官に見つかって施設に預けられた時は嬉しかった。

そりゃ、飯付きで寝床があるんだから、公園より10倍はマシである。

それに、施設にはPCがあつた。

「暇潰しにでもなれば」と一台購入して共用で使つてゐるらしい。

共用は共用なのだが使う人は俺とごく少数の人だけだ。

卷之三

P  
M  
2  
3  
:  
3  
1

じぱり<sup>く</sup>固谷市内を歩き、施設へと戻る。

「お帰り。気持ち良かつた?夜の岡谷は」

施設で知り合った縁髪の少女。名前は……ハルカって言うんだつけ。

まるで妻のように出迎えられるので毎度困っている。

「気持ち良かつたけど、出迎えはしなくていいよ↑へーへ・  
「むうー、何でよ？」

「それは……その。何だ」

と、質問の答えに困つていぬと..

「はいはい、そこの人。みんな寝てるんだから、早く寝なさい」

俺達に注意を促したのは、ここの中間人を勤める女性である。要は一番ここで偉い人って訳だ。

「今日は管理人さんが来たから仕方無いけど、明日は…ふふふ」

不敵な笑みを浮かべるハルカ。  
なにこの子こわい（・・）

「ね、ねちゃみ...」

：明日が不安だ。

A  
M  
0  
:  
0  
6

俺は、新作の東方神靈廟をプレイしようと試みた。

一時間後…

「よし、6面：神靈廟Normalは比較的簡単だな。easyモード（笑）なんて言わせない」「男なら」*Lunatic*だぜ」

…ん？誰かの声がしたような気がする。気のせいかな…

「あー、二つの間にかコンティニュー画面…仕方ない、やり直す」

そして、誰かの声がしてから不思議な現象が起きる。

…神靈廟の自機選択が「霧雨魔理沙」しか選べなくなつたのだ。

「うふふ 霧夢さん選べない」

仕方なくこの魔理沙と並ぶキャラを使つ。

しかし、不思議な現象はこれだけに止まらなかつた。

…今度は、*Lunatic*しか選べなくなつていた。

「神主さん、助けてお（・・・・）」

どんづん笑えなくなつて来る。

プレイする気も失せて、現在時刻を確認するために時計を見る。

「お、もう深夜2時か…寝ないとやばいな。まあ明日何も無いからいいけど」

PCの電源を落とし、布団に被る。

ただ、神靈廟をプレイしてた時の不思議な現象は、何か起ころうのでは…と不安を感じた。

だが、不安な気持ちになつているよりは他のことを考える方がマシだ。と言つ結論に至つた。

幼き頃の自分と、妹が遊んでる姿を照らし合わせる。

悶助「霧雨…魔理沙。何か、うちの妹と似てるんだよなあ。」

鬼「…」をしている。

とびつきりの笑顔で妹が俺を追いかける。

親は二コ一コしながら俺達を見ている。

この時は、俺は2歳で妹は1歳か。

幸せだったなあ…

…

所は幻想郷。博麗神社では何やら話がされていた。

「へえ、霧雨悶助…ね。魔理沙の兄でただの人間、か。まあいいわ。面白そうだし、魔理沙も再会つてことで…（チラツ」

幻想郷の大賢者、八雲紫は彼を幻想入りさせる気満々だ。  
まあ、妖怪に喰われたとしても責任は取らないが。

「…私は別に構わないわよ。でも、魔理沙と血縁関係だからなあ…」

博麗の巫女、博麗靈夢は血縁関係と言つことに不安を感じているようだ。

「血縁関係でも、性格は違うと思ひわよ？流石に…  
「そうよね…そう信じるわ

そもそも、何故幻想入りすることになつたかと言つと、紫の盗み聞

きから始まつたことだつた。

神社での靈夢と魔理沙の会話にて、「お兄さんとか居るの?」と聞く靈夢に、魔理沙が居るぜ、と言つた後自分の兄について熱心に語り出したのだ。

たまたま見えない所で聞いていた紫が興味を持つて…となつて、今に至る。

「それじゃ、行って来るわ」

紫は、早速行動に移した。

1話「憶記」（後書き）

初投稿です

## 2話「異世界」

朝9時。

その日は、生憎の雨でとても外に出られる状況ではなかつた。

悶助「ん…？ アラームなんて設定してなかつた筈だが

「おはよう」

「うん？おはよひ…って　え…？」

悶助が驚くのも無理なかつた。

何故なら幻想郷の大賢者・八雲紫が目の前に居るからだ。

「霧雨悶助くんだつたかしりっ？」

紫は、妖艶な色氣で此方に近づいて来る。

「あ、はい。でも、何で八雲紫さんが居るんですか？」

名前を聞いた瞬間、ピクッと反応する紫ちゃん。  
刺激しちゃつたかな(・・・)

「…あなた、私の名前を知つてるのね？」

「この世界では幻想郷は一次元ですから、情報が入手出来るんです

よ」

「それなら理にかなつてるわね。それで、本題なのだけれど。  
あなたを、幻想郷を連れて行きましょう

「は？ 幻想郷？」

俺は頭の中が真っ白になつた。

一次元に行くことなんて出来るのか？

「…………。」

「何も言い残すことはないのね。なら、話は早い」

紫は悶助を幻想郷へ連れて行くのであつた。

PM15・05

悶助は、深い森の中に落とされた。

「あいたた……！」ははどこだ？といふか紫さん？…」

紫の姿は無く、あるのは森だけだ。

「まさか……魔法の森！？ そしたら、神社日描さないとまずいな  
……」

まずいと言つのは、妖怪がいつ襲つて来るか分からぬからである。  
妖怪に遭つたら命は無い。

「服とかは変わらないみたいだな。良かつた良かつた」

PM15・58

おいおい、本当に神社なんてあるのか？

歩いても歩いても、ゴールが見えない。俺はどこへ向かってるのだろうか？妖怪の恐怖に少々怯えながらも、彼は歩いた。

「あの鳥居と石段… 博麗神社か？」

悶助は左上の方向に博麗神社があるのを確認すると、全力で走り出した。

「これは襲われる前に行くしかない！ チエストオオオオー！」

「今日も快晴ね… あの紫の言つてた奴、もう幻想入りしたかしら？」

靈夢はお茶を啜りながら、淡々と言つ。

「…まあいいわ。暇だし寝ようかなー」

10分後。

博麗神社の前に着いた。やつと、ここまで来た…

道中、犬のような妖怪に出会った。

何とか逃げてきて服の部分部分をちぎられただけで済んだが…。

「石段が意外あるな… ザつと120段はある」

石段を登る気力もほぼ残って無いが、力を振り絞って登り続けた。

神社の鳥居に着き、辺りを見回すと人の姿は無かった。  
出掛てるのかな、と思いながらもここで生きていくのによし、お祈りすることにした。

PM16:44

チャリーン

200円を入れた。

俺もあまりお金には余裕は無かったが、ここに生きて行く為だ、これくらい問題ない。

「ここに生きていけますよ！」

お賽銭を入れ、お祈りをし、神社を後にしようとした瞬間だった。

「あ、お賽銭ありがとー」

そこには、紅い服を着ていて、腋が露出しているのが特徴の巫女さん 博麗靈夢が居た。

「ん？… つい、靈夢さん？」

「あら、私のこと知つてるの？」

「外來人ですから」

「そう。…お賽銭、本当にありがとね」

靈夢さんは自然に笑みを零していた。

生活、そんなに切り詰めていたのか…（・・・）

「お賽銭、誰も入れてくれないんですか？」

「あなたが初めて入れてくれたのよ」

「そうですか…神社はお賽銭入れるのが普通だと思つけどなあ（・・・）

「そ、そうよね！？ やっぱりそうよね！？ そうだよねー！？」

「でも、靈夢さんがそんなお賽銭お賽銭言つからいけないんじゃ」

「でも、靈夢さんが俺の肩を掴んで涙田で聞いてくる。  
現代で当たり前、と言つものば、幻想郷では通用しないのだ。

神靈…

夢想封印!!

靈夢さんは問答無用の夢想封印を俺に仕掛けってきた。

ちよ、事実は事実でしょ。素直に認めてくれよ(・。・。・)

「うふ~ 素めろわあああああ

何と言つ暴力巫女… (。・。・)

まだ住む所も決まって無い悶助。これからどうするかを考え始めたのであった。



## 2話「異世界」（後書き）

幻想入りしました！

ただそれだけ（・・・・・）

## 「紅毛館を田舎して」

P M 1 7 : 0 4

…ひひ、身体中が痛い。

夢想封印をまともに喰らったのかと聞かれれば、否ではないが。

そもそも、何であんなに自然に靈夢さんと喋れたのか分からぬ。

無意識…って訳でもなさうだし。

「起きたわね」

そこへ靈夢さんがやつて來た。加害者とは言え、手当てませしてくれたようだ。

「んと、血口紹介してませんでしたよね？ 僕の名前は…」

「霧雨悶助、でしょ？ ちょっと可笑しな名前ね。」

何で靈夢さんが知ってるのだろう、とは思つた。  
でも博麗の巫女なのだから幻想入りしてくる人物の情報を入手して  
るんじゃないかと思うと別に疑問では無かつた。

「まあ、親から授かつた名前ですから。」

「もんすけ…だから、あだ名はもんなんてひつかじら

もん、か。いいあだ名だ。

あだ名なんて今まで付けて貰つたことの無い悶助は、喜んで了承した。

その後、俺達はこれからどうに住むか、と言つのを考へ始めた。

「……じーつ。」

「うちにはダメよ。神主が許さないわ」

「神主なんて居たんですか？」

「ええ。……それで、いくつか候補があるんだけど

「紅魔館とかやめてくださいよ」

紅魔館は、悪魔の住む館だ。死亡フラグしか立たないだろう。

「あら、でも他の所も紅魔館並みに危ないんだけどねえ？ それに、ここから一番近いのは紅魔館だし、道のりも安全でしょう」「なるほど、だから選んだのか……これが最後じゃないといいですけど。」

「もんなら大丈夫よ。多分」

「はあ……」

多分で。

何と信憑性の無い言葉だつ。俺は頭を抱える。

「な、何よ？」

「いや、何でもないです。んじゃ、行つてきまーす」

「はい、行つてらっしゃい」

死亡フラグしか立たないが、とりあえず田指してみることにした。

「あの大きい魔力……あれは魔法使いに転職出来そうね。無職から  
「少なくとも魔理沙よりは大きいわね……相当な力の持ち主かな」  
「ええ。……多分、七曜の魔法使いよりも魔力は大きいわ」

霊夢は紫の言葉を聞いてびくっと反応する。

「……相當ね。スペルカード持たせとけば良かつたわ  
「まあ、悶助くんなら大丈夫だと思つわよ?…弾幕の出し方とか教  
えてる前提で大丈夫、と言つてゐるけど。」  
「……あ。(。。.)」

PM20・21

悶助は、妖怪に注意しながら紅魔館を田指していた。

「えつと、北へ進めとか言つてたな霊夢さん。」

三時間程歩いているが、未だに紅い建物は見えない。

「まあ、北へ行けばなんとかなるよな。」

気楽な考え方で、俺は紅魔館を田指していた。

「…夜9時。現在魔法の森。夜となれば、妖怪の出現率も上昇するものだ。

「…紅魔館に着くとかその前に、寝る所が問題だった（・・・）

」

食料も道具も武器も持っていない。妖怪達から見れば、格好の餌食だ。

どうじょつかと悶助が頭を悩ませていた。魔法を使つか？いや、無理だな。

そうせりつて立ちぬくしていると、突然一人の少女が現れた。

「あら、こんな所に人間？また物好きな人間も居るものね」

## 4話「人形師」

「あら？ こんな所に人間？ 物好きな人間も居るものね。」

突如、1人の少女が此方に声を掛けて來た。

金髪の髪に、難しそうな本を持つていて、人形と何やら話している。  
恐らく、自律人形だろう。

「…アリス？」

「あら、あなたとは面識が無いのだけれど… 何者？」

「シャンハーハーイ」

人形使いであり魔法使いでもある、アリス・マーガトロイドが目の前に、此方をやや警戒しながら立っていた。上海人形だと思われる人形は、剣を装備し戦闘準備に入っていた。

「待て待て w 僕は怪しいものじゃない、外来人だ。何故知つてるかと言うのは…」

「…詳しいことは私の家で話しましよう？ 多分、寝床も無いんでしようし泊まさせてあげるわ」

「シャンハーハーイ」

この人は心が読めるのか？ w

こう思いながらも素直に嬉しかった。知らない人間を泊ませてくれるのだ、感謝感激だろう。

アリスはそう言うと足早に北へと歩いていった。

上海はまだ警戒心を解かず、剣を構えていたがじばりへかると警戒を解いたのか、剣をしまった。

アリスの家は湖の近くにあり、俺を見つけた場所からほんの少し遠く無かつた。…待てよ？ 湖？ まさか…

「ここのが私の家よ。どうぞ入って」

「お邪魔します」

アリスの家の中は、とても整理されていた。足踏み式のミシンがあり、裁縫が趣味なのか？と思いつながら部屋へ案内される。

「ここのがあなたの部屋。自由に使って構わないわ」

「ありがとうございます（、・・・）ブワッ」

「話は下で話しましょう」

「はい（、・・・）」

感謝の気持ちでこっぽこになり、若干涙目になりながらも下へ案内される。そして、椅子に座った所で話が始まった。

「さて… あなた名前は？」

「霧雨悶助と言つ」

「霧雨… まさか、魔理沙と関係があるのかじりっ…」

「魔理沙？」

魔理沙って、神靈廟にも出てきた女性だよな。

「あ、知らないのね。ならいいわ」

「はあ……？」

魔理沙つて、まさか消えた妹のことじや……ないよな。

「そういえば、私の名前を言つて無かつたわね。改めてアリス・マーガトロイドよ。」

「改めて霧雨悶助です。アリスさんと言えばいいのか？」

「アリスでいいわよ。あなたは、どう呼べばいいかしら？」

「もん、と呼んで欲しいな」

「そう。んじゃもん。あなたはどこに行く予定だつたのかしら？」

「紅魔館。靈夢さんに紹介されて、目指してるんだけど……」

「ああ、ならすぐそこよ。だけど、今は夜だから近づかない方がいいわね。あの姉妹も活動も活発になる頃だし」

…え？ すぐそこ？

やつぱり、あの湖は霧の湖だつたのだ。嫌な予感が的中し、うなだれる悶助。

「…分かった。ありがとな」

「今日は行っちゃダメよ。明日の暁とかにしなさい」

「了解（・・・）」

「あ、後あなた外来人だったわよね？ ちょっと現代と言つのを知りたいわ」

アリスさんは目を光らせながら俺に近づいて来る。  
現代の話、か。してあげてもいいよな。

PM23:46

…部屋へと戻り、早速ベッドにハリウッドダイブする悶助。  
とてもふかふかで、柔らかかった。

「ふかふかだwww うはwww 気持ち良いw」

これなら気持ち良い朝を迎えるわせつだ…(・・・・・)

さつきまで現代の話しててちゅうと疲れてたんだよね。うん

悶助「んじや… めやすみなさい。nnnnnnn…」

…

AM2:01

アリスは、悶助のことについて考えていた。

「弾幕は教えてあげましょうか。…あんな悪魔の館に行くのだから、少し鍛えておかないとね。試しに?と戦わせましょう」

アリスは、一応教えてあげることにしたのだった。

## 5話「弾幕と氷精」

AM 8:00

目覚まし時計は無かつたが、気持ち良く眠れたので目覚めはとても良かった。

ふと、悶助は思った。

「…」に住みたいね（・・・）」

住ませて貰えれば、紅魔館に行くことにはならず死亡フラグが回収されるのだ。

…しかし、口には出せなかつた。流石に図々しきであるにも程があるだろう。

「あら、おはよう。目覚めはびつかしら

「最高だ。GJ！」

「そう。良かったわ。…朝はん出来るから、下に来なさいね

アリスはそう言つと、下へ降りていつた。シーツ、整えないとな

下へ降りて朝はんのメニューを覗いてみると、パンに紅茶、目玉焼きと言つ俺に取つて最高のメニューが出来た。これが、理想の朝だ…

「アリス、ありがとな」  
「何よ、こきなり。」

「こんなに気持ちのいい朝は初めてだからさ」

「…そう。良かつたわね」

「ああ。本当にありがとう。アリスはいい人で、優しい人だ」

面となつて、こんなに感謝の気持ちを伝えられるのは初めてだ。  
しかも優しいだなんて言われた。

…アリスはやや赤面しながら、朝食を取り終えた。

AM9:30

一旦落ち着いたので、アリスは話を持ち出した。

「もん、唐突だけど弾幕は撃てる?」

「…撃てる訳無いでしょ。ただの人間なんですから」

悶助の言う通りだ。何も力を持つていない人間に、弾幕を撃てる筈が無いのだから。

「あなたに、力があるか試すのよ。弾幕を教えてあげるわ

「……」

悶助は、自分に力なんて無いだろう…と言つ氣持ちはよりも、力の有無を確かめたい気持ちの方が強かつた。

力があれば、紅魔館での戦闘はなんとかやつていけるような気がする。そう思ったのだ。

「分かつた。」教授よろしくお願ひします

AM9:55

「んじゃ、まず私が手本を見せるわね。撃ちたい弾を想像して、擊つのが基本ね。」

アリスは、そう言つと水色の弾幕を放つた。水色の弾幕は、木に当たり木を折つた。

あんなのまともに喰らつたら、一溜まりも無いな。

「それじゃ、やってみましょうか。丸い弾を想像したら、手を前にかざしてみなさい」

「分かつた」

悶助は、赤色の丸い弾を想像して、手を前にかざした。

すると、赤い大きな弾が出現し、悶助の頭上を浮遊し始めた。

アリスは、その弾の大きさに圧倒された。

「!?

「...アリス? どうしたんだ?」

「え? あー、何でも無いわ。さて、弾幕を動かす方法だけど前に動かすには腕を振りかぶるのよ。」

「ほつほつ。… じつか？」

悶助が腕を振りかぶると、大きな弾が真っ直ぐ飛び、木々をなぎ倒し湖に落下した。

悶助は自分でも少々驚いていた。俺、人間だよな？

この人間、大きい魔力を持つてるわ。

アリスは、悶助は紅魔館でやつていけることを確信した。  
後は、スペルカードがあれば尚更良いだろう。スペルカードが無くてもやれそうな気はするが。

「良し、あなたに力があることは分かったわ。試しに、湖に居る氷精を倒してきなさい。倒したら、そのまま紅魔館に向かいなさい。いいわね？」

「と言うことは、お別れか… こんな人間を泊まらせてくれて、ありがとな」

「…もつと力を付けたら、私の所に来なさいね。歓迎するわ」

「うう…（ 、 ; ; ; ）ありがとう、アリス。さよなら。」

最後まで、いい人だつたなあ。

こんな俺に優しくしてくれるなんて（ 、 ; ; ; ）

更に興味が沸いたわ。

アリスは、そう思った。あんな人間は、初めて見たからだ。今までも外来人を泊めた経験は幾らかあるが、その中では一番だろうか。

何よりも、魔理沙の兄と言つことにも驚いたし、弾幕もちょっと教えた程度であんな強い弾を出せるのだ。心配は無い。

今度、もんと戦つてみたいわね。

その時は、あの子も強くなつてるでしょうね。ふふふ

悶助の成長を期待する、人形師であった。

悶助は、湖に着いた。見渡しても誰も居ない… 氷精と言つのはほどこだ？

すると、突如湖から小さい女の子が出て来た。青のリボンに水色の髪。普段湖で過ごしてゐるからだろうか、裸足だ。

「あんた、誰？ 人間？」

それはまさしく……では無くチルノであった。なるほど、？なら大丈夫だとアリスは思ったのか。

「なんだ、？か…」

「？じゃないわよー？なのはそっちでしょー！」

……そういう所が？なんだよと、溜め息を付く。  
反論も子供の貫禄だな。うん

「？と言つた仕返しに、弾幕で返してやるわー！」

氷符：

アイシクルフォール！－（easy）

無数の氷柱の弾幕が此方に襲つて来る。悶助は落ち着け、と自分に言い聞かせながら、赤色の丸い弾を3つ程想像し、手をかざし、腕を振りかぶつた。

赤い大きな3つの弾幕はチルノに向かつて飛んで行き、チルノに全弾命中させた。

／ピューン／

「くわー……覚えてないー！」

自分も氷柱の弾幕を喰らい、両腕を負傷した。

肉までは貫いていないようだが、出血が酷い。

俺は、ポケットに入っていたティッシュで患部を巻き、湖の氷を潰しあイシングをした。

これでしばらくは大丈夫だらう。

手当てを終えた俺はチルノが居るか確認したが、チルノは居なかつた。

ピチュったのか？しばらくしても襲つて来ない。

「倒したのかな？逃げたのかもしれないが……ま、いつか（・・・）」

悶助は、先を急いだ。後少しで、紅魔館だ。

## 6話「剣と血」（前書き）

今回某セガのハイスピードロボットバトルの武器が登場します。

あくまでレプリカです。人が扱えるように加工した、って感じかな  
?

## 6話「剣と血」

「で、でかいな…」

悶助は、遂に紅魔館に着いた。想像してたのとは違い、その大きさに圧倒された。

さつきチルノと戦闘した時の傷はまだ痛むが、痛みは無くなつて来て…ない。チルノもなかなかやるな。

おまけにヒリヒリする…これから戦闘とかあるのに、大丈夫か俺。

門の前に来たのは良いのだが、門は開いていた。

隣には中華風の服、橙色の髪に、龍と書かれた帽子を被つている人が居眠りしている。

…紅魔館つて、こんなに警備薄かつたけ？（・・・・）

居眠りしている女性の名前が思い出せない。

本みりんだけ？くれないみすずさんだけ？と何とか思い出そうとしたが…諦めた。

ごめんなさい、本みりんさん。（・・・・）

安易に紅魔館へは入れたが、見つかったら一間の終わりだ。  
あの吸血鬼の生け贋にでもなるんだろうかと思つと、背筋が凍る。

しばらく、館の外で音を殺し潜んでいたが、

「侵入者らしき人物を発見。直ちに戦闘チームは拘束に向かえよ。」

多分妖精メイド隊だろうか、そいつらに見つかったようだ。

「うわ、マジかよ…」

拙いとは思つが、武器も持つていない。何か辺りに武器になるものは、と思ったが、あるのは草むらだけだ。

「…れ、靈夢さん！紫さん！誰でもいいから（ゝゝ）

俺には、助けを求める他無かつた。

もちろん、ダメもとで助けを求めているつもりだった…

すると、助けを呼んだ瞬間、紫さんが現れた。

まるで待つてました、のようにひょいと現れたが、今はそんなこと考へてる場合では無い。助けを求めた。

「紫さん、助けて下さい。どうやら妖精メイドに見つかったようだ…」

「直接助けてはあげないけど、間接的に助かる方法ならあるわよ。」

…その時はやや混乱していて、紫さんが何を言つてゐるのか理解出来なかつたが、とりあえず方法とやらを教えて頂いた。

「その方法は、何ですか？」

「武器を取つて戦う。これしか無いわ。…あなたに、この武器をあげる。」

手渡されたのは、人間にでも持てる1200g程度の重さの剣。リーチはやや短いが、金属の剣で威力は高そうだ。

「その武器はデュエルソード。近接用の武器よ。ただ、レプリカだから安物の剣なんだけど…」

悶助は衝撃を受けた。

おいおい、某セガのハイスピードロボットバトルの剣じゃねえかwww

初期装備にしては、強かつたよな。デ剑コンボ強いよデ剑コンボ。

「いえ…ありがとうございます!!助かりました」

「…まあ、あなたなら出来るわ。保障は出来ないけど」

悶助は無言で紅魔館の中へ去つて行つた。彼の力は、未知数だ。も

しかしたら、かなり強い力を秘めてるかもしれない。

「…でもあの子、あのレプリカの剣貰えてかなり嬉しそうだつたわね。外の世界から持つてきた甲斐があつたわー」

紫が満足そうに隙間を閉じた一方、悶助は紫から貰つたデュエルソードで妖精メイド達と戦つていた。

「いやあ、剣貰えるとは思わなかつたよ。レプリカでも金属は金属だから十分かな？」

悶助のテンションが上がる最中、そこに戦闘チームかと思われる妖精メイドがやってきた。

「よし、かかるといい…」

悶助は決闘だと思い妖精メイドが剣を抜く時を待つ。

「メインターゲットを発見。排除します」

妖精メイド達は弾幕を撃つてきた。

あれ？ 決闘じゃないのか（・・・・）

「そりいえば、弾幕の存在を忘れてた…」

悶助は、すっかり忘れていた。

何か策は 。

そうだ、アリスが教えてくれたことを今ここで…

しかし、弾幕はもう近くに来ていて、此方から弾幕は打てなかつた。

「ええい、剣を振り回せー！」

悶助がデュエルソードを振った瞬間、弾幕が反射された。  
そして弾幕は妖精メイドの方に飛び散り、妖精メイドは逃げるよう  
に奥へと走つて行つた。

「くつ、喰らつたか 」

妖精メイドは上手く撒けたようだが、今度は右脚を負傷。

血がぽたぽたと滴り落ち、傷も皮膚が剥がれ生々しく残つている。  
ティッシュもチルノと戦つた分で使い切つてしまつたので、手当て  
は出来なかつた。

悶助は、痛みを堪えながらも何故これくらいの怪我で済んだのか?  
と思っていた。

あんなに大量の弾幕を、このデュエルソードが守つてくれたのか…?

悶助は、少し笑みを浮かべた。

悶助「…痛みは残るが、剣に守られては俺も情けないな」

俺は、地面からテュエルソードを抜いた。

この剣は、俺を守ってくれたんだ。今はそう信じよう

「さて、行きますか。」

1人の人間が、悪魔の館の中へと消えて行つた。

「お嬢様、多分人間だと思われる者が侵入した模様です」

「ふふふ、そうね。まずは手当てをしなさい。その後は…力の有無を確かめるわ。」

「妹様の所へは？」

「勿論行かせるわよ。けど何か、感じるのよね… あの人間から。」

## 7話「大図書館」（前書き）

話は展開速すぎたらいいけないと思つてるので、結構ゆっくり進ませてもらっています

速いか遅いか分からぬけれど…（・・・・・）

## 7話「大図書館」

P M 1 4 : 1 1

「大分痛みが引ってきたな。右脚はまだ痛いが……ぐつ。」

痛みがやっと引いたのは、チルノと戦った時に受けた両腕の傷だ。  
俺は、両腕に巻いてたティッシュを外し、右脚に巻いた。  
両腕の傷は、かさぶたが出来ていたので問題ないと判断した。

「……ただ、俺侵入者扱いされてるからなあ。メイド長やあの吸血鬼  
に見つかったら… D E A D E N D だな」

だが、メイド長や幼J【規制】あの姉妹と一度は会いたい。  
と言づか、会わなきや來た意味ないな……（・・・）

：戦闘やレプリカの剣のことで頭がいっぱいだった俺は、本来の目的を失いかけていたようだ。

俺がここに来た理由は、ここに住ませてもらひたいこと。

ただそれだけだ！（・・・）キリッ

「…入つてもいいわ。」

「失礼致します。現在、あの人間が大図書館へ向かっている模様です。」

「ふーん、パチエの所に行くのね。…いいわ、今は好きにさせときなさい」

「承知致しました。」

「…」

…ん？ 何か分からないうが、俺は外に出でてしまったようだ。

「迷子になりそうだな… どこ向かつてんだ？ 俺」

PM14:48

紅魔館の門の付近は晴れていたんだけどな…  
濃霧に包まれ、先が見えない。…俺、ジャングルまで来た覚えは無いぞ。

「ついでに、しづらか歩いてたいたよつで、大きい建物が俺の田の前に現れた。

「お、また何やら建物を発見したが…まさか、ヴァル大図書館か！」

本物を目の前にして、改めて驚く。

でも、図書館つて別館にあつたのな<sup>w</sup>  
俺は吸い込まれるように図書館に入った。

PM14・54

「…侵入者？ それも人間の匂いがするわね」

悶助に気付いたこの図書館の管理人？ と言つべきだらう少女が、警戒を始めた。

「パチュリー様へどうしました？」

赤の髪に、黒の服を身に付けた悪魔？ が言つ。

「人間が侵入したっぽいから注意しなさい」

「見つけたらどうしますか?」

「そうねえ……」

「こちへよこしなさい」

「分かりました~」

月の帽子を被り、紫の服を身に付けている少女の名は、パチュリーと言つようだ。

すっかり紫もやして定着していたので、本名を忘れていた。危ない危ない……

俺は、まだあの赤髪の悪魔?には見つかっていなかつた。  
暇だったので、本を見てみることにしたのだが……

「幻想郷縁起つて…… AQNの書いたものだよな、すげえww お、  
ここにも不思議の国のアリスとかあるw」

「見つけましたー パチュリー様」

「そう。んじゃこっちによこして」

うつ、バレた。

俺はどうすることも出来ず、図書館の真ん中辺りまで連れて行かれ  
た。

アクロバティック飛行で連れて行かれたので、ちょっと頭が痛い……

「ふーん、あなたが…… 例の人間ね?」

「えつ」

「話は聞いているわ。ユミィからね」

「えつと、侵入者は侵入者なんですが訳がありまして」

「あなたの名前は？」

俺の言い訳を無視し、話を進める。…聞かれたことだけ答えようか。

うん

「霧雨悶助です」

「霧雨…悶助？」

「はい」

「…まさか、魔理沙のお兄さんかしぃ」

「魔理沙？」

「知らないならいいわ」

毎度毎度、魔理沙って言つ人が出でくるな。

…そんなに魔理沙って人は、人気なのかなあ。

「…その剣は何？」

「デ剣…じゃなくて。デュエルソードと言う金属の剣です」

「ふーん…面白い武器ね。でもかなり脆そうだわ」

「レプリカだから尚更脆いと思します（・・・・）」

「…」

「…」

2つの火ののような弾幕が、俺に襲いかかる。  
なつ、不意打ちか！？

「あなたを試したの。今度はこれで行くわよ」

パチュリーさんは、水のレーザーと水の大きな泡を俺に撃つて來た。

「俺は……剣を信じる！」

俺はデュエルソードで見事にレーザーを斬り、泡も斬つてなくなつていた。

「……ひ。やるわね。あなたを甘く見ていたわ

だけど

これに耐えられるかしらー！？

田符

ロイヤルフレア！！

「何だー？」の太陽のような光は……」

近付いて来る度に、光の体感温度も高くなる。

此処までか、俺……

……

P M 1 5 · 3 4

「あれ。俺は一体……？」

パチュリーさんは思考停止してゐるのか、棒立ちのまま動かない。

それよりも、デュエルソードはどうだ？  
そう思つて握つてゐる剣を確認すると……

デュエルソードの次の剣、「マーシャルソード」に進化していた。マーシャルとは、軍用と言う意味で、軍用の剣と言つことになる。

「あなた…何者！？」

パチュリーさんは少し怖じ氣づいたように声を震わせながら、俺に問い合わせる。

「ただの人間ですよ。そんなに怖がらないで下さい、パチュリーさん」

「優しいのね…」

「では、失礼しますね。ここに住むことになったら、その時は… そうですね、魔法を教えて下さい」

魔法を使えたらいいなーと言う淡い期待である。  
ほら、リリルなはとかおジ魔女とか。

「…ここに住めたら、ね。」

「はい（・・・）」

俺は図書館を出た。

さつきまでの濃霧は消えており快晴になつていて、何となくだがすがすがしい気持ちになつた。

さて、約束したからには生きて帰るか。

悶助は再び本館を指した。

## 7話「大図書館」（後書き）

文章力無さ過ぎワロタ。  
自分でも痛感してます(、 、 )

8話「メイドとナイフ」（前書き）

ナイフは新型高振動ブレードかな（^-^）と思いましたが普通の銀製ナイフにしました。

咲夜さんがそんな危ない武器持つても仕方ないか（ピチュー

## 「メイドヒナイフ」謝

PM16・01

ふう。

俺は今紅魔館の本館に居る。

いつ捕まるか分からぬ状況だし、剣は構えているのだが…

「誰も居ないのか？まさか、留守とかじゅう無いよね。」

1階は誰も居なさそうなので、2階へと向かった。

紅魔館、2階。

「お、妖精メイドがけりゃ面るな。」

2階へ俺をおびき寄せせる作戦か？と思ひ、マーシャルソードを構える。

「居たよーにしだー。」

…やはり、おびき寄せる作戦らしい。

「咲夜さんが、こんな見通せる作戦を出す訳無いよな…あ…

妖精メイド達が立てた作戦なのだろう、と思ひ俺は少し警戒を強める。

「再びメインターゲット発見。排除します」

妖精メイドは、弾幕を撃たなかつた。決闘か？  
すると、妖精メイドは鉄の剣を抜いた。  
やはり、決闘かと思ったのだが：

「…あれ？三人とも一人つて決闘じゃなくね？」

妖精メイドは三人居て、三人同時に剣を引き抜いたのだ。

妖精メイドの鉄の剣は、細い刀身だつた。

マーシャルソードの刀身の太さを10とするとき、妖精メイドの持つ  
剣は2くらいか？

「三人なら勝てる！」ここで成敗だ、人間！」

…何故だろう、成敗と言つ言葉はどうしても成敗にしか聞こえない。  
い。どこのジスだよ。

「その細い剣、今にも折れそうだな…」

妖精メイドは斬りかかつて来たが、頭の構造が単純なのか?  
挟み撃ちなど全くせず、正面で俺を狙つて來た。  
おおう、こわいこわい。

とつあえず正面は危ないと思ったので、マジト運動の基本である前転をした。

前に動けば、剣はまず当たらぬだらう。

「マジト運動、こいつこいつ時に便利だよね、うん

「とつやあー」

「ー?」

剣は当たらなかつたが、背中が痛い…

前転痛いお(・・・)

妖精メイドは俺が前転したせいで足を引っ掛け、顔から倒れたようだ。

「あいたた…あれ?俺のマ剣が見当たらないんだが

マーシャルソードがどこを見渡しても見当たらない。どこ行ったんだ??

デュエルソードはレプリカだったのでまだしも、マーシャルソードは話が違う。

俺のマーシャルソード、ビリこつたんだよ…(・・・)

とりあえず無防備ではいけないので、倒れている妖精メイドの鉄の剣を2つ奪った。

「これでダブルセイバーだ…いや、モハの双剣か。…よく見るとオーダーレイピアと似てるな」

ダブルセイバーだから、大技のクロスハリケーンとか…いや、無理だな。まず大怪我する。

あ、モハの鬼人化なら出来るな。

ただあくまで動作だけで、攻撃力が上がる訳でも無いし需要は全くないが。

…つと。遊びはここまでにしておこう。

まだ妖精メイドが居るかも知れないからな。

その頃、紅魔館4階。

「失礼します。お嬢様、の人間は現在2階に居るようですが

「…そろそろね。咲夜、行きなさい」

「承知致しました。」

紅魔館2階。妖精メイドが居ないか警戒していたが、ビリやらあの三人しか妖精メイドは居なかつたらしい。良かつた：

2階に居ても仕方ないので、俺は3階へ向かつた。

3階となると相当な警備がされているだろうと想定し、慎重に階段を上がる。

3階に到着。

警備はどうなつてゐるかと覗くと…

「彼は3階に居るはずよ、全力で探しなさい」「了解しました！！」

そこには、紅魔館のメイド長、十六夜咲夜と20人は居る妖精メイドが居た。

このキャラの名前は覚えてたぞ。うん

「…おおう、こわいこわい。なーんて言ひてる暇じゃないな」

でも、今更どうやって逃げる…

窓を見ると、門の前は妖精メイドによって封鎖されており、逃げ道は無い。

「剣も誰が盗んだのか分からぬしな…」

目的は住ませてもらうことなのだ。無駄な抵抗はしない方が無難だらう。

俺は観念し、3階の踊場へ向かう。

しかし、そこには誰も居なかつた。あれ？ 妖精メイドと咲夜さんは

ビーム

「あら、観念したようね？」

咲夜さんは急に現れ、ナイフを突き付ける。

ついでに、持っていた鉄の剣も奪われてしまった。

「抵抗はしませんよ」

「ふーん、人間なら抵抗すると思つてたけど…心外だわ」

「それよりも俺のマーシャルソード、知りませんか？」

「ああ、あの剣？ あれなら2階に落ちたから回収したわよ

…え？ 落ちた？

でも、確かマーシャルソードはあつたはず…

「…隙を突きましたね？」

「へえ、バレるなんて思つて無かつたわ」

「いつの間にかあの剣が無くなつてましたからね。バレるでしょうに」

「（…え？何故私だと分かつたのかしら？まさか、私の能力を見抜いてた？いや、考え過ぎね。相手はただの人間。見抜けるはずが無いわ」

「（…何考えてるんだ？）」

悶助は隙を突き、後ろへ下がる。

「何か考え方でもしてたんですか？」

「…ちょっとね。あなたをどうやって殺すか、よ。」

「俺を殺しても何もならないですよ」

「人間でここまで来れたのは…あなただけよ」

「それは光栄です」

「剣は返すわ。この剣、お気に入りなんでしょう？」

咲夜さんが剣を投げたので、俺は黙つて受け取った。  
これから何をするか、俺も咲夜さんも承知の上で。

「…一刀流だが大丈夫か？」

と最後にルシルのように話し掛けた。

「ここが、あなたの墓場よ」

あちやー、流石にエ  
ダイネタは通らないか。

8話「メイドとナイト」（後書き）

H ダイネタ入りましたー！

流石咲夜さん。マ剣を盗つたのはあなたでしたね。

血祭りに上げてやる（アーッ

【番外編】東方×B.B オープニング（前書き）

グラセフからボーダーブレイクに変更

## 【番外編】東方×B.B オープニング

「はあ？変な境界が出来てる？」

「ええ。境界を無かつたことにしようとしたのですけど、どうやら効かなかつたようなのですわ」

妙な境界が出来たと言われても…な感じで見つめる靈夢。また異変は勘弁して貰いたい。

「…別に、幻想郷に影響が無ければ境界はそのままいいと思つけど」

「それが影響するのよ。もし大量にロケットランチャー等の武器が来たとしたら、迷惑だしそれは博麗神社に落ちる予定な」

「…行くわよ。早くそこに行かせて」

靈夢は神社に落とされたらたまらないと、早く行かせように迫る。

「まあまあ、何があるか私も分からぬ世界に一人で行くなんて危険過ぎるでしょう？複数人で行くべきですわ」

紫は無駄にキリッとした顔で、靈夢に問い合わせる。

「… それもそうね。とにかく、集めて来て頂戴」

「分かったわ」

そして、靈夢を含めた7人の住民が、集まつた。

## 9話「決闘、そして吸血鬼」

PM17:28

「決闘ですね」

「ええ。弾幕も交えながらのね」

相手は俺が能力を知つてることを知らない。  
そして、俺は試しに聞いてみた。

「…まさか、能力使いませんよね？」

「あら、使うつもりだけど。容赦はしないわよ」

この人は鬼か。とも思つたが、良く考えると俺…

侵入者だった（・・・・）

「さて… 始めましょうか…！」

咲夜は早速能力を使った。彼女の能力は、「時を操る程度の能力」。  
THE WORLD、時よ止まれッ！とはまた類が違いますよ、お客

わん。

…まあ、やつてゐる」とせ回じだと黙りながい。

「じめんなさいね。だけど、ここまで来たあなたが悪いのよ。悪く思わないでね」

咲夜は大量のナイフを悶助に投げ、微調整をし時を戻した。

「（来たーこれくらいお見通しです^o^）」

俺はマーシャルソードを振り回し、ナイフを全て反射させた。ふう、後1秒遅れてたら本当に死ぬ所だった（・・・）

「つ、反射させたー？」

流石に反射することはパークメントメイドでも予想出来なかつたか。しかし、咲夜さんは被弾しなかつた。

おいおい、実は人間じゃありませんってパターンかこれ。

「…だけど、そのマーシャルソードさえ壊せばいい話ね。簡単だわ

「あ（・・・）」

しまつた、壊すと言つ手があつたか。

あ、まだあの双剣があるじゃないか。でも…

咲夜「考える暇なんて、あるのかしら?」

メイド長は再び時間を止め、マーシャルソードをナイフで破壊しようとしましたが…

咲夜「…くつ、硬い。鋼鉄で出来てるのかしら」

マーシャルソードは、基本鋼鉄で出来ている。  
デュエルソードとは違い一段階の攻撃が可能になった。  
隙も大きいが、当たれば即死級だ。

ちなみに、某口ボグーでは隕鉄塊やチタン鋼を使用する。

「今度こそ、最後かしらね。でも、剣は壊せなかつたわ…」

咲夜はナイフを再び配置し、微調整する。  
そして、また時を戻した。

「必殺! マット運動・前転!」

ダメ元のマット運動。俺、オワタ…

「あれ… 血が出てない?」

俺はビビも怪我をしていなかつた。

マット運動マジ便利(\*・・\*)

この隙を使って、マーシャルソードを奪おう。

「避けた！？ぐつ、また時間を…」

「させるか…！」

俺は遠心力を使って剣を薙ぎ払つた。

しかし…

「あ、危なかつたわ…」

この時、メイド長にギリギリで時間を止められてたことなど知る由もない。

そして、時は戻る。

「えええ！？おい、当たつてなかつたのか！？」

ナイフは全方位に俺を囲むように並んでいて、そして襲いかかって来る。

あまりに予想外過ぎるな、これは（ 、 、 ）

「ハ、このマーシャルソードで弾く！」

俺はマーシャルソードでナイフを弾いた……はずだった。

「残念。死角にもナイフを設置してたのよ」

死角を突かれでは、ビリじょりもない。

剣で弾けなかつたナイフは左肩を通過したようで、左肩は切り傷で済んだのだが…

「み、右足が…」

右足も剣で弾けなかつたナイフがそのまま刺さつていた。

肉を抉るような痛みに、苦悶の表情になる。

「結構、楽しかったわよ？それじゃ…せよしなら

咲夜さんは、俺の頭目掛けて回し蹴りをした。

俺の意識は、そこでシャットアウトされた…

その一方、意識を失った悶助をどうじようかと考えている咲夜。

「…私が判断することじゃないわね。お嬢様に判断して頂かないと」

…すると、咲夜の方へ歩いてくる小さい女の子。

ピンク色の帽子に服を身に付け、吸血鬼だからか小さい黒い翼が生  
えている。

「咲夜、何をしたのかしら」

「この人間をどうしようかと考えているのですが」

「……。まだ殺しちゃダメよ。パチエよりも大きい魔力があるから  
「？」

咲夜は首を傾げた。

魔力？そんなものが何になるのだろうか、と

「この人間、何か力を持つてる…私と戦わせようかしら？まあ、と  
りあえず手当してやって」

「…承知致しました。」

「ん？ 見慣れない天井だな、それに俺ベッドの上に居るのか？」  
悶助は、何故生きてるかも疑問だつたがとりあえず身体を起<sup>レ</sup>しそうとした。

「いでででーーー、まだ痛むなあ。チルノの時の痛みとは比較にならない…（、・・・）」

両足と両腕には包帯が巻かれていて、手当てがされている。  
…この館で手当て出来る人物と言つたら咲夜さんしく

「あら、起きたかしら。人間」

そこには、10歳くらいの幼女が、面白そうに俺を見つめていた。

「あ、あなたは…」

「私の名前はレミリア・スカーレット。この館の主よ。」

おお、生れみりやだ！ 生幼女、生れみりやだ！

「え、えつと俺は霧雨悶助です。」

「霧雨…悶助（笑）あつははははーーー」

レミリアは大爆笑し始めた。…作者と親を憎むぞ。俺は

「…素直に傷つくんで、やめてください（・・・）」

「ふー、悶助なんて笑える。久しぶりに笑ったわ、ありがとう」

「…そりゃどうも。悶助なんて呼びにくくと思こますからもんと呼んでください」

…実を語つと、別に名前は、自分でも変だと思つのであまつ傷つかない。

俺、怒れない体質だからなあ。

こんな体質じやなかつたら、今頃かんかんになつて怒つてたかも。

「もん、ね。分かつたわ。それで、あなたに伝えたい」とがあるわ

「何でしょう？」

「あなたは、ここに住むことになつたから。」

… むむ。おおおおーー?

うは～ こんな上手くいくとは思わなかつたwww  
心の中で自分にガツツポーズしながら、少し涙目で言ひ。

「お、俺なんかが住んでもいいんですか！？」

「ええ。よろしくね、もん…だけ。」

「は、はい。よろしくお願ひします( ； ; ; )」

「( わて…パチュに勝つたこの人間は、どれほど強このかしら~。)」

いつつて、悶助は紅魔館で住むことになつた。

## 9話「決闘、やして吸血鬼」（後書き）

やつと悶助が紅魔館で住むみたいです。

マーシャルソード、咲夜さんに盗みられ壊され……めんよ。マ剣や  
ん（：：：）

## 10話「能力」（前書き）

今回で悶助の能力が分かります

## 10話「能力」

AM9:50

悶助が幼J【規制】… レミリアに住めと言わされてから一日が過ぎた。

「おはよう」ざこさん、もんさん

「あれ？ 咲夜さん、何で俺の名前を…」

「お嬢様から聞きました。あの時はすみませんでした」

「いや、勝手に侵入した俺も悪いですから謝らなくていいですよ」

元は俺が悪いので、咲夜さんに謝られても困るのだ。

それに咲夜さんは本当に申し訳無をやうな顔をしているので、更に対応に困る。

れみりやにかなり怒られたのかな（・・・）

と思つてると、向こうから話を振つて来てくれた。ふう…

「あのマーシャルソードと言つものは、鋼鉄で出来てゐるのですか？」

マーシャルソードの話か。

マーシャルソードは確か隕鉄塊と…って、隕鉄塊って存在しないよな。

「うーん、鋼鉄で出来てると思しますよ。ナイフでは壊せないと思

う」

「もうですか…あの剣、私壊そうとしていました。」ここで謝罪を「別にいいですよ。謝る」とではありません。それより、鉄の双剣はどうへ…」

「あ、あの双剣、妖精メイドの剣でしたので妖精メイドに返しました」

た

…咲夜さん、部下に優しいなあ。

わざわざ俺が盗つた剣を返して行くなんて…

「もうですか…わざわざ返すなんて咲夜さん、優しいんですね」

すると、咲夜さんはスカートを少し持ち上げ、お辞儀をした。

「お褒めに預かり光栄です」

…ん? 何か、スカートを持ち上げる前の立つてゐる位置と、持ち上げた後の位置が違うような気がする。

俺は、気になつたので問い合わせてみた。

「あのー、もしかして今時間止めたりしませんでしたか?」

「……」

咲夜さんはかなり動搖した。やっぱ、時間止めてたんだ…

あれ? でも何で時間を止めるのだらう?

「…それ以上私に質問したら、殴ります」

「す、すみません（・・・）」

明らかに殺氣立っていたので、俺は黙つて聞くことにした。  
「う、メイドさん怖こマジ怖いよ。

AM10:38

「…あ、せうだ。もとさん、住むことに関して話があります」

咲夜さんは落ち着いたのか、住むことについて話を持ちかけた。

「もん、で構わないですよ。タメ語でおくです」

「うですか、では。…あなたには、ここで執事をしてもいいわ

…は？

俺が、執事？

「え、マジですか？」

「マジな

「決定事項？」

「ええ。お嬢様の命令だから」

ええええええええええええええ！？

いや、俺マジで何も出来ないって  
大丈夫じゃない、問題だ。

「どうしたのよ？執事をやるのが嫌なら今すぐ

「やります！やりますから！」

「それでよろしい。あ、後血液型は何型かしら？」「

「え？B型ですが…」

「（…一番美味しい血ね。好都合）」

まさかとは思うが、血液型聞いて場合によつては吸血される、なんてことは無いよな…？

敢えて咲夜さんは聞かなかつた。咲夜さんを信じたよ、俺。

… そのことが、現実になるのはまた後の話。

PM13:30

昼食を取り終え、一段落付いた悶助は早速咲夜さんの元へ向かつた。部屋を開けると、咲夜さんは執事用の服を用意してくれていた。

「はい、これ。寝る時やお風呂以外はこの服装で

「ありがとうございます」

「後は出来るわね？」

「…ネクタイだけ、お願ひ出来ませんか？」

ネクタイの付け方など俺には分からぬ。高校生でも無いし仕方ない…よね。

咲夜さんはしょうがないわね、みたいな顔で素早く付けてくれた。  
…出来れば、もうちょっととゆっくり付けて欲しかつたが。

「はい、これでよし。」

「ありがとうござります」

「さて、仕事だけど… その前に、パチュリー様があなたを呼んでるわ

「そうですか、では行つて来ます

「こつてらつしゃこ

PM14:04

俺は、大図書館に着いた。

侵入した時の濃霧は無かつたが、若干曇り空だ。

「失礼しまーす…」

図書館の中は暗い。夜はここに行きたくないな、うん

「あ、また侵入者さんがいらっしゃいましたー」

「違うわよ。もう住むことになったのよ、この子は

赤髪の魔女？」

「え！？ し、失礼しました。お前言つてませんよね。小魔女と申します」

「霧雨悶助です、よろしくお願ひします」

「此方こそよろしくお願ひします」

あ、小魔女さんか。あの紅魔郷の4面中ボス。  
素で忘れてた…すみません、小魔女さん。

「あなたはどいつ呼べばいいのかしら？」

「もん、と呼んで下さい」

「分かつたわ。…」ほん。もん、あなた能力を持つてるかもしけないわ。

「本当にですか！？」

おお、俺にも能力があるのか。

やつば、魔法を使える能力が欲しいな。  
ほうきで空飛びたい。

内心でkでtでkしながら、パチュリーさんの話を聞く。

「まあまだ能力があるとは決まってないけどね。どう? 確かめる?」「お願いします(・・・・)」

パチュリーさんは能力の書、と言うのを使い確かめるらしい。対象を魔法陣の中に入れて調べるだとか。

卷之三

パチュリーさんは何かを唱え始めた。

じばりく待つてゐると…

魔法陣が現れた。この中に入ればいいのか、と思い入る。

「そのままじぼりく待つてね」  
「はい」

20分後。能力の有無が出たらしい。

「出たわ。あなたの能力は……」

……ごくり。固唾を飲んで待つ。

あなたの能力は……

魔法と空間を操る程度の能力。

## 10話「能力」（後書き）

魔法と空間を操る、ですが魔法は「使える」で、空間は「操る」です。

魔法は操れないよね。うん

## 1-1話「スペルカードを作りつ」

PM14:31

魔法と空間を操る程度の能力。

えっと、これは喜んでいいんだよな？

魔法使えるなら早速お外に出たいです、はい。

「チート級の能力ね。後もう一つ能力があるわ」「え？」

空想上のものを実体化させる程度の能力。  
おお、試しに魔剣実体化してみるか？

「SW・ティアダウナー。」

すると、本当にティアダウナーが出てきた。  
どこから出でてきたのか知らないが嬉しい。

「マジだわ すげえww」

ちなみに、ティアダウナーとは取り壊すと言つ意味である。  
SWはソードの略なので、まとめるときり壊す剣、になる。

しかし、手に持つてみると随分と軽いな。

またレプリカだつたりするのかな…（・・・）

「！」の能力は危ないわね。無闇に！」の能力は使わない」と。いいわ  
ね？」

「はい。ところで、魔法はもつ使えるのでしょうか？」

「そうね…試しにほつき貸してあげるから、飛んでみなさい」

パチュコリーさんからほつきを貸して貰った。

俺は早速ほつきに乗ったのだが…

「うわっ、制御が出来ないぞ！？」

ほつきの制御が出来ず、ほつきが暴れてしまった。

…ほつきって、暴れるものだっけ（・・・）

「ほつきを握つてみなさい」

「は、はーー！」

俺は急いでほつきを握ると、ほつきが落ち着き始めた。

パチュコリーさんにみると、ほつきに魔力を入れないと暴れるらしい。

…なにそれこわい（ 、 、 ）

そいつ言つことは、予め言つてくれ…

「あれ、でも魔力なんて無いんじゃ… ただの人間ですよ。俺は」「魔法と空間を操れる人間がただの人間な訳無いでしょ」

「あう。何も言つ言葉が無い（ 、 、 、 ）現に、今飛んでるからただの人間じゃないか。

「一旦降りて来なさい。まだやりたいことがあるから」「分かりました」

俺は一旦旋回して、徐々に高度を下げた。  
そして無事に着陸をして、パチュリーさんの所へ向かつた。  
…つう、お尻が痛い。（ 、 、 ）

PM15・09

「今度は魔力を測るわよ。これは魔力を数値化出来る眼鏡。」

「ほうほう、分かりました」

パチュリーさんによると50000を越えると相当な魔力、らしい。

少女計測中…

3分後。

パチュリーさんは計り終えたようだ。  
すると、急に俺の肩を掴んで…

「も…もん!…?」

パチュリーさんは、身体を震わせている。  
あの、落ち着いてください(、・・・)

「え、パチュリーさんどうしたんですか」「さつき計り終えたのだけど… あなた、人間じゃないわね?」

お前ら人間じゃねえ!って。

パチュリーさんに言われたくありません(、・・・)

「いくつだったんですか?」

「…108479。私の魔力は76550だから、私よりも魔力があるのよ」

ちよつと何言つてゐか（r y

「嘘を付かないで下さい」

「あら、私嘘は嫌いよ？」

「…（、・・）」

俺がパチュリーさんよりも魔力があるって…  
悶助は信じられなかつた。人間が魔女に勝つのか？と…

ガタン！！

「…？」

「（、・・）！？」

どこかの扉が開いたのか？周りを見渡すと…

「話は聞かせてもうひつたー……」

ああ。やつぱ幼J【規制】レミコアは可愛いなあ (\*、 \*、 \*)  
カリスマなんてどうでもいいや。うん

そう和む顔でレミコアを見つめていると……

「何よ、もん。哀れみの目で見てくるなんていい度胸ね」

「いえ、かわいいなあと思いまして」

「…お世辞は効かないわよ？それよりもパチエ」

「何？」

「もんにスペルカードを作りさせましょウ」

スペルカードかー

…溜符「かめはめ波」作ろう。ハツシヨウ

「△ ンボール禁止」

…ん？どこからか声がしたがスルーするか。

「んじや後はパチエが教えてね。私は忙しいから」

「はい、はい。」

「（やつぱり、もんは強かつたわ。だけど…まだ、私には及ばない）

」

ミコアはそう言つと出て行つた。

PM15・32

「んじゃ もん。スペルカードなんだけど…」

「一つ思い付いてるものがあるのですが」

「なら話が早いわ。後はこの紙に手を置いて、そのスペルカードの  
弾幕をイメージすれば出来上がり。」

「分かりました」

悶助はドンボールのかめはめ波をイメージした。

すると、かめはめ波のような模様が紙に出来た。成功か？

「成功ね。後は魔力を使って発動するだけよ」

発動のポーズは何でもいいらしい。

「よし…行きますー！」

溜符…

この時点でポーズをするらしい。

俺は片手を上げてカード宣言した。

かめはめ波！！

すると、マスタースパークのような光砲が出現し、一直線上を光が包んだ。

俺は叫びながらしばらく放っていたが、しばらく放つてたせいが光砲が消えた。時間制限とかあるのかな？

ふう、かめはめ波はやつぱり気持ちいい！…つて！？

かめはめ波の影響で図書館の一部が壊れたのだ。

あちゃー、別のところでやれば良かった…と後悔しても遅い。

あのー、パチュリーさん？

パチュリーさんは怒りを抑えてふるふる震えていた。  
パチュリーさんこわいマジこわい（・・・）

「…見事に壊してくれたわね（> ^ #）」

「…」めん、なさい（、・・・）」

色々と大変な紅魔館の生活。

悶助は、この生活についていけるのか心配になつたのだった。

## 1-2話「人里での出会い」

パチュリーセンより魔力があることを知つてから一日が過ぎた。

俺は人里へ買い出しに行くよつに咲夜さんから言われた。  
レミリアのティータイム用のお菓子が無くなつたらしい。

俺は、すぐに支度しほつきで人里へと向かつた。

PM16:00

人里でそのお菓子が売つている店に着いた。

ほつきに跨いで空を飛んだのだが、図書館で飛んだつきりほつきでは飛んでいない。

…やっぱ、いきなり行かせる咲夜さんも咲夜さんだよなあ。

地上100mでも怖いお(・・・)

すると、商人が俺の顔を見る度話しかけた。

「あんた、見ない顔だな。どこに住んでるんだ?」「紅魔館に住んでるよ」

商人は大層驚いた顔をした。まあ、吸血鬼の館だからな……

「良く住ませて貰えたもんだなw」

悶助「あの館に到着するまでの道のりも長かったもんだ」「もつと、話を聞いてみたいな。どうだ、30分くらいいけるか？」

「大丈夫だ」

「よーし、んじゃ中に入つて入つて。」

少年談話中……

商人は、外来人には興味があるようで外の世界のものや道具を教えた。

商人は、頷くばかりだったがかなり為になつたようだ。

「色々教えてくれてありがとうよーまた来てくれた時には歓迎するぜ」「おう、それじゃあな」

商人に別れを告げた…その刹那。

「どいて下さーい！！」

「（ 、 、 ） ……？」

ドンー！

あいたた… 何が起こったんだ?  
そう思いながら身体を起こしてみると…

緑色の綺麗な髪に、この人も巫女さんなのか? 靈夢さんと同じく腋  
が露出していて、蛙と蛇の髪飾りを付けていた。

「すみません、急いでいたもので…」

「ん? あ、大丈夫だよ。」

「そうですか、良かつた…」

…ん? この人、見たような気がする。  
俺は、思い切って聞いてみた。

「えつと… もしかして、東風谷早苗さん?」

すると早苗さんは立ち上がり…

「え? そ、 そうですけど何で私の名前を…」

「俺、外来人だから外の世界で知つたんだ」

「なるほどー あ、あなたの名前も伺つていいですか?」

「俺は霧雨悶助。…あ、早苗さん急いでたんだつけ? 邪魔してごめんな。んじや」

「あ、待つてください!」

早苗さんは俺の手を掴んだ。

掴む手は、靈夢さんと同じくらい小さく、よつと氣がした。

「(、 、 ) ?」

「」、今度会つたら… うちの神社、来ませんか?」

### 会つ前提 w

…ほん。確か早苗さんの神社つて一人の神様が鎮座してるんだつけ。

大丈夫かな俺(、 、 、 ) オラだんだん不安になつてきたぞ。

「え、いいの?」

「はい。明日のお昼頃に来てください、案内します

「…ありがとうございます。」

「では、私はここで失礼しますね」

「ああ。んじやまた明日。」

早苗さんせやつまつとすぐに小走りで去っていった。

さて、俺もそろそろ帰らなこと…

げっ、17時56分！？

やっぱー。咲夜さん、どんな顔して待ってるだろ? なあ…（・・・）

PM18:06

俺はよつやく帰宅して、バレないよつにキッチンへ行くと…

「遅い。遅いわよ。何してたの？」

そこに不機嫌な顔で出迎えたのはやっぱり咲夜さんだった。

「早苗…いや、よつと山の上の巫女さんとお話をしていた」「…早苗でしょ。いつの間にか仲良くなつてたのね？」

「あー、咲夜それは嫉妬かしら？」

「お嬢様！？」

傍で聞いてたのか？レミリアがひょっこりと現れる。  
咲夜さん、誰に嫉妬してるんだろ？

「あ、そうだもん。あなた、今夜私の部屋に来なさい。」「えっ」

「拒否権は無いわよ。館の主は私だからね」「分かりました、行きますよ（ 、 、 ）」「あ、お料理のお手伝いお願ひね」「料理の経験無いですよ」「居ないよりはマシだ」「みー」

咲夜さん酷い。マジ酷いよ（ 、 、 ）

そんなことよりレミリアが俺を部屋に誘つてしま  
嫌な予感しかしないんですが。

AMO : 01

レ//コアの部屋にて

「さて… あなた、B型だつたわよね？」

「俺は逃げるぞ！逃げるぞおおーー！」

何この吸血フラグ。

逃げるしか選択肢に無いっす。

「あ、待ちなさいーー！ 咲夜！」

「あなたの時間は私のもの 私の時間は私のもの  
「どこのジャーンですか（、、）」

まあ、見る限り咲夜さんやレ//コアも俺には親しく接してくれてる  
のかな…？

「いや、ただの執事として接してるけど

「お嬢様と同じく。」

心まで読むなんてあなたたちは何者ですか。超人？さいですか。

：いや、超人と言えば超人だよなこの二人。

もう幻想郷の住民つて人里に住んでる人を除いてほぼ超人なんじゃ  
ね？

無論、チルノも不老不死な訳だし。？だけど

そう思えた一日であった。

### 1-3話「俺と巫女と妹と」

「ユニアリアお嬢様。今日、博麗神社に行つてもよろしいでしょうか？」

「うう、お嬢様なんて慣れないなあ（・・・）

執事だから仕方無いと言つたが、今日初めてお嬢様つて呼んだもんな。

「…博麗神社？靈夢のところへ行くのかしら」

「はい。靈夢さんに少し用がありまして」

「なるほど。それなら私も行つていいかしら？」

レミコアが顔を近付けてくる。

あの、近付ける意味が分からんのですが…

「へえ… 私が顔を近付けても緊張しない人間は、初めて見たわ。」

「さいですか」

まあ、色気は…幼女だし無いよね。

するヒドキドキする要素が無いのですよ、お嬢様。

「失礼ね…どうこうことよー！」

レミコアを俺の心を見事に読み、怒りながら問ひ。

「いや、事実ですから」

「…ふふふ。ふふふふふふ。いい度胸よ、もん。今夜どうなるかを」

「「あんなでこママ」」めんなさこ（ 、 、 、 ）」

昨日結局吸血されたので、また吸血されるのは遠慮したい。

「まあ、吸血と云つてもほほ血っぽしてたけど（ 、 、 、 ）」

「もう行く気失せたわ。一人で行つて死ね！」

「ひどいですお嬢様（ 、 、 、 ）」

ハリコツに罵倒されながらも俺は紅魔館を出た。

AM9:56

俺は紅魔館を出発した。

博麗神社を目指しほうきで飛んでたが…

「今日は気持ちいい快晴だなー 日向ぼっこしたい気分だ（ 、 、 ）

」

俺は日向ぼっこをすることにした。  
と言つわけで

場所は…霧の湖でいいかな。今日ちょっと暑いし

ふう、気持ち良い…

霧の湖を選んだのは正解だったか、と寝転びながら思つ。

時計を見ると、10時を過ぎていた。  
それも20分くらい経っていたので、そろそろ神社へ…と考えていた刹那。

「あなたは食べられる人間?」

俺の目の前には、金髪で黒い服を身に付けている少女が顔を覗かせていた。

何か、今物騒なこと言わなかつたか? ( 、 、 )

「俺は食べられないぞー」

「そーなのかー」

とりあえず、名前を聞いてみることにした。

これからも会うかも知れないし、名前くらい知つとかないとな。

「名前は何て言つんだ?」

「ルーミア。」

「ルーミアか、よしよし。あまり、人は襲うもんぢやないぞ?」

「えへへ…」

ルーミアは頭を撫でられて嬉しそうだった。…意外と、かわいいな  
おい。

「んじゃ、俺はこれで。バイバイ、ルーミア」  
「バイバイ」

俺は、霧の湖を後にした。でもルーミアって…

人喰い妖怪だつけ。  
危なかつたなー 朝だからまだ良かつたけど、夜は気を付けないと  
な…

一方、その頃博麗神社には黒い帽子を被つた少女が遊びに来ていた。

「おーい靈夢、遊びに来たぜー」  
「お菓子は無いわよ」  
「今はお茶が飲みたい気分だからいらぬいぜ」  
「そう」

博麗神社が見えて來た。

AM10・44

遠くからは良くな見えないが、靈夢さんが居るのは分かる。

隣の魔法使いみたいな女性、誰だろ？神靈廟で、自機キャラとして出たあの少女か？

「それが、ヒサヨウトモ……（、・）……」

しばらく飛んでる間に、もつ博麗神社の田の前まで来てたようだ。更に、鳥居にぶつかりそうになつて避けようとしたが…遅かった。

「うわあああああ（るよ…ぐはつ。」

俺の意識は、またもやシャットアウトされた……

109

そうか、俺は博麗神社に…

「う、ちょっと鼻が痛いな。皮剥けたかな？」

「皮剥けただけで済んだのは、結構すごいわよ…」

「ターミー タージやないよな？俺  
でも、軽い怪我で済んだのはいいことだ。と思つていると…

「お、起きたようだな。大丈夫か？」

黒い帽子を被つた魔法使いの少女が、顔を覗かせてきた。

あれ、この人…

「…魔理沙？」

自然と言葉が零れた。

…神靈廟の時から気にはなつていたが、完全に霧雨魔理沙と四つじ  
とが分かつた。

「あ、兄貴…？」

兄貴…まさか、魔理沙が

「まさか遠足のバッグ残して消えた妹つて…魔理沙なのか…？」

すると、霧夢さんが口を挟んだ。

「え！？ 魔理沙のお兄さんってもんだったの！？」

「お、おひ。バッグを残して消えた妹ってのは、私だぜ」

「…何か、邪魔したわね。失礼するわ

「ああ。悪いな靈夢さん」

AM11：12

「…そうか。そういえば、魔理沙って名前だったな。」「思い出すのが遅いんだぜ」

「『めんごめん。それで、何で』『…？紫さんか？』  
「当たりだ、紫に連れてこられたんだぜ。神隠しだの『ひの言つて  
な』

「そつか。…魔理沙が紫さんに攫われた後の話、聞きたいか？」「いや、遠慮するぜ。また…暗い話なんだろう？」  
「ああ。公園に捨てられたわ」

魔理沙は、そう俺が言つと涙を流し始めた。

「兄貴…良く生きたな…」「何も、泣くことじやないだひつ」「泣く」とだつ…」

魔理沙の涙ぐんだ怒声に、俺は心打たれる。

「魔理沙……『めん

「分かれば…いいんだぜ」

「…ここでの生活も、苦しかつただろ？俺と親が居ない生活なん  
てさ。」

「ずっと…寂しかったぜ。孤独だった。今は靈夢とか居るけど、兄  
貴が魔理沙、と言つまでは寂しいままだつたぜ」

「…そうか。俺よりも、数倍は辛かつたよな。折角だ、再会出来た  
奇跡に抱き合つて喜び合おうじやないか」

……兄貴！－！

俺と魔理沙は、同時に強く抱き合つた。

まるでお互いの辛い過去を、一瞬に消し去るよつに抱き合つ。

今は、何も考えずただ抱き合おう…

じぱり俺達は抱き合つていたが魔理沙が落ち着いたよつだ。

「もう離れていいぜ」

「ああ、分かったよ」

「あ、のさ兄貴」

「ん？」

「」」」ちでも… よりしくな」

再び会えた喜びを抑えているよつた顔に、俺も顔が緩む。

「ああ。 よりしく。 魔理沙」

妹が魔理沙と言つたことが分かり、俺の心が喜びに満ちる田になつた。

PM12：15

一方、靈夢さんは軒先でお茶を飲んでいた。

「兄と妹か… 私も妹だつたら抱き合えたのかなー」

若干、兄妹と言つ関係が羨ましく思えたようだ。

「靈夢さん、ちょっといいで聞いてもいいえるかな？」

靈夢さんが軒先でお茶を飲んでいたので、今だと話掛けれる。

「何？」

「紅魔館で住めることになつたんだ。紫さんの助けもあつたけど、靈夢さんが居なかつたら今頃死んでたかもしれない。本当にありがと」

お嬢様に許可を得てまでここに来た理由は、靈夢さんにお礼する」とだ。

「まさかの再会で、忘れかけてたけど（・・・・）

「…私は、紅魔館と言う場所を紹介しただけよ」「それでもだ。ありがとな」

靈夢さんは小さく笑みを浮かべ…

「…ふふふ。変な人」

「讃め言葉なのか？」

「つーん…讃め言葉かな？」

靈夢さんは、顔を少し赤く染めながらニコッとしていた。

やつぱ、幻想郷の超人達ってかわいい人ばかりだよな…

「今日はいい気分だからお賽銭入れてやるぜーんじゃ、私はお先に失礼するぜ」

「は！？ ちょ、魔理沙！」

「俺も失礼するよ。お賽銭、少ないけど入れていくぞ  
…一人とも、いい奴じゃない」

魔理沙は、上機嫌で魔法の森へと消えていった。

今度、魔理沙の家行こうかな。

消えた妹との再会に、笑みを零すのだった。

## 14話「495年齋」

AM10:22

魔理沙と再会してから1日が過ぎた。

俺は、執事としていつも通り仕事をしていた。

そして、咲夜さんから窓拭きをするよつ頬まれていたのだが…

「ふう、大変だな。窓何枚あるんだ（・・・・）」

流石に四階建ての大きな館だけあって、バケツを持ちながらの作業はきつい。

少し、休憩しようか…その時だった。

「あら、ここな所に居たのねもん」

そこへレミコアがやって来た。

起きたばかりなのか？少し眠そうな顔をしていた。

「おはようござります」

「それよりも…妹との再会はどうだった？」

おこおい、何時の間に居たんだ貴女は…（・・・）  
俺は若千ジト目でレミコアを見つめる。

「…見てたんですか？」

「まあね」

「ま〜」へ何かに満ち溢れた顔をしていたので、ついでに聞いてみた。

「何か、良いことでもあったんですか?」

「聞きたい?聞きたい?」

レミコアが顔を近づけて来る。

いつもに増して目がキラキラしていたので、少しひびくつした。

「まあ、まあ聞きたいです

「教えてあげなーい」

…やつぱぱ子供だなw

そう思いながら、俺は自然と言葉を零した。

「…」の時が、一番可憐いんだけどなー

俺は、無意識に窓を拭き終え、二階へと移動したのだった。

「かわ、いい？…な、何よそれ！全然嬉しくないんだからねつ」

PM12:40

やつと窓を拭き終え、咲夜さんの元へ向かつた。

「拭き終えました…ふう、きつい。」

「大変だつたでしょ？普段は私が全部してるんだから

そうか、咲夜さんも苦労してるんだなー

つておい。

確か、俺が初めて紅魔館に来た日は妖精メイドが窓拭きしてたよな？  
疑問にしか思えなかつたので、聞いてみた。

「…俺が初めてここに来た時は、妖精メイドが窓拭きしていたよ」  
な気がするんですが。」

「あぐつ：忘れてなかつたのね」

「一週間前ですよ!? 俺の記憶力でも（ry

「……」、「飯出来たからあつち行つてなさい！」THE WORLD

ଦ୍ୱାରା ମୁଦ୍ରଣ କରିଛନ୍ତି ?

あれ、咲夜さんもジョジョネタ知ってるのか？

…あ、でも幻世「ザ・ワールド」って言うスペルカードあつたよね。  
ジョジョネタ分かる人と言えば…

「盐见出まれッ!」

やはり貴方が  
ですよね

「早く行かないと追加でナイフもあるわよ」「分かったからそのナイフしまえ（・・・）」

俺はすぐにレミリア達が居る場所に向かつた。危ない危ない……

俺は、一通り仕事を終えて休んでいた。

「ふかふかだー（＊、＊、＊）」  
やつぱ、ベッドは最高つすなー。

至福の時を味わつてこると…

「あ、居た。もん、話があるわ。」  
「あいあい」

急にレミコアが部屋に入つて來た。

いつもよりも真剣な顔つきだったので、びっくりしたが…

それほど大事な話なのだらひ、と思ひ椅子に腰を掛ける。

「さて…もん。私から直々に頼みたいことがあるの」  
「はい、何でしよう?」  
「…私の妹のことなんだけビ」

妹なんて居たのか…

俺は、とつあえずその幼・】【規制】妹について聞いてみた。

「妹？」

「ええ、フランって言つただけだね。495年間、今まで地下で幽閉しているの」

495年間だと！？ おまわ

吸血鬼って成長しないのかな？頭とか胸とか。

「…何か失礼なこと考えてなかつた？」

「考へてないです（；、'、'）」

「…本題に戻るけど、フランを外に出してあげたいと思つる」

「俺は、そのフランを外に出す役目な訳ですか」

「そう。私が外に出やつとするとすぐ弾幕じりっこになるから… もんに行つて欲しいの」

話をまとめると、フランをとつあえず外に出せばこりしー。

…しかし、495年間も幽閉されていたのか。  
流石に心も閉ざしてゐるんだなうなあ…どうやって心を開かせれるか?

「お願い…出来るかしら?」

レミコアに懇願されれば、云々とは言えなこだわり。  
答えは勿論…

「分かりました。」

PM22・48

俺は、図書館にやつてきた。

図書館の地下にて、フランは叫んでいた。

「あら、久しぶり。」

パチュリーさんが声を掛けて來た。  
何か、難しそうな本読んでるな…

「久しぶりですね、パチュリーさん」  
「ところで、付き合って欲しいことがあるのよ。こいかしら?」

「はあ。ひょっとなさいこですよ」

パチューリーさんはそいつひと、一冊の本を取り出した。

「あなた、この呪文を読んで幻獣、グリフロンを召喚出来る?」

幻獣グリフロン?

北欧神話とかそこら辺の、幻獣だつけ。

「呪文が読めれば、の話ですが…」

「魔力があれば読めるわ」

「ほうほう。ならば読みましょ」

パチューリーさんよりも魔力はあるから、召喚なら何とか出来るか?  
俺は、その本を受け取り呪文を読んだ…

読むこと5分。

長いなおい。幻獣だけあつて召喚するのは大変だ…  
やつと最後の文を読み終え、魔法陣が出現した。

「よしーそのまま待つてればおkよ

パチュリーさんに言われるがままで、待つていると…

馬に翼が生えた生物が出現した。

これがグリフォンなのか、生グリフォンだ。オラすゞくワクワクして

てるぞ。

「おお、これがグリフォンですか」

「貴方…やつぱり欲しいわ」

「え？」

「…いや、何でも無いわ」

「はあ…あ!? 僕、ちょっと急いでるんで失礼しますね！」

時刻は23:37。

睡眠時間を確保する為に、俺はフランの元へ向かったのだった…

## 14話「495年闇」（後書き）

次話、フランと弾幕「」です。

幻獣、グリフォン、馬の形をして翼を生やしてるって Wikipediaに乗った記憶があったので書かせて頂きました。 Wikipediaでもう一度確認しておきます。

【番外編】東方×B.B 第1話（前書き）

東方×ボーダーブレイク。  
ボーダーブレイクはググればすぐに分かります。

駄文です。駄文でもいいならお読み下さい

【番外編】東方×B.B 第1話

博麗神社にやつて来た、6人の住民。

まずは一人目：

「紫が呼ぶなんて珍しいな。気まぐれか？」

霧雨魔理沙。

二人目。

「大妖怪が直々にお呼びなんてね。何かの異変？」

レミリア・スカーレット。

三人目。

「お嬢様の付き添いでありますが故」

十六夜咲夜。

四人目。

「今日は妖怪の山で宴會する予定だつたのに…」

東風谷早苗。

五人目。

「あらあら、随分集まつてるわね～」

西行寺幽々子。

六人目。

「…また異変か何かのかしら?」  
「んなに集まつて」

八意永琳。

「6人集まりましたわ」  
「選んだ理由は?」

靈夢は無表情で紫に質問する。

「魔理沙が正解」  
「やつぱりな」  
「え、どこに行くんですか?」  
「行つてからのお楽しみ」  
「異変解決とかは、やりたくないわよ」  
「いいじゃない」面白そうだし」  
「異変なんて久しぶりじゃない、早く行きましょうよ」

2名程文句を言つも、靈夢達7人はボーダーブレイクの世界へ飛び込むのであつた…

## 1-5話「地獄の血闘」

PM23:45

今、俺はフランの部屋だと思われる扉の前に居る。

「何だ、これ……」

その扉には、何重もの鎖が掛けられており、所々には血痕が付いていた。

人の骨や破れた血のぬいぐるみ、ついには人の腐った肉も散乱している。

「俺、生きて帰れるかな（・・・）」「

いや、マジで不安なんですが。

弾幕じつこになるだろ（なあ…）と、俺は静かに扉を開ける。

「これはひどい。 骨が大量に散乱してゐる」

部屋の中は、ランプが一つ点されていて、テーブルには飲みかけの血の紅茶。

部屋の奥は…骨で埋め尽くされてゐるな。

「誰？」

部屋の奥から、レミリアと同じ位の幼女が出て來た。  
金髪に赤色の服を身に附けている。

「この娘が…フランか」

「私の名前知つてるんだね。 あなたは誰？」

「霧雨悶助。 人間だよ」

「新しい遊び相手？ 弱そう…」

「弱そうで悪かつたな（・・・・）」

遊び相手…勝てるのか？

でも、まともにやりあつても勝ち目は無いだろう（・・・・）

そう考へてみると

「んじゃ、強いんだね。あはは……」

禁忌「クラシックコード」

四方八方に迫る弾幕が、悶助を追い詰める。

「おいおい、いきなりスペルカードなんて何てことをするんだ!」の娘  
は。

俺は、通常弾幕でとりあえず凌いだ。

それにしても、弾幕の量が多い……魔力も幻獣を召喚したせいで殆ど残っていなかつた。

「あれ？ 壊れてない？」

「弾幕なら打てるからな」

「そつか……んじや、遠慮無く

フランは低空飛行しながら俺を追尾し、弾幕を撃つてくる。  
くつ、魔力は殆ど無い状況でこれはきついな。

「壊れちゃえ！壊れちゃえ！！」

禁忌「レーザー テイン」

「うわっ、何だこのレーザー！？」

極太のレーザーが薙ぎ払いで襲いかかってくる。

：まともに当たつたら丸焦げだろうな。上手に焼けましたー  
てか。

俺は避けれた。

避けられたのだ。

十分避ける範囲だった。

しかし、予想以上に大炎剣レーザー テインの攻撃範囲は広かつたの  
だ。

かすつただけなのに、俺の右腕の一部の皮膚が一気に溶けて、肉が  
むき出しになってしまった。

つああああああああああーー!

# 俺の想像を遥かに超える痛み。

まさに、空前絶後の痛みである。

痛みが強すぎるが故に、俺は立っても居られない状況だ。

新角選手の味とも思つた

まだ、幻想郷に来たばかりなのに……

こんな所で

死ねるかよ！！

「……くつそ、何か攻撃を仕掛けないと……」「何で逃げるの？逃げて楽しい？タノシイ？」

フランは、ゆっくりと俺との距離を縮めて行く。  
近距離では何をされるか分かるまい。  
何か、武器でもあれば……

そうだ。俺にはもう一つ能力があつたじゃないか。

「空想上のものを実体化する程度の能力」  
だつけ？忘れたけど、これで何か武器を出せば……！

ラストサバイバー・レプカ！！

ラストサバイバー・レプカが出現し、俺はレプ力を力強く握る。  
輝く剣の刃<sup>エッジ</sup>は、鋭く光っていて、力強さを感じさせられる。

フランは今狂氣の状態だ、何か攻撃をしなければ俺は死ぬ。  
死ぬとフランを助けられないし、俺自身も悔いが残る。

…フランを出来れば傷つけたくは無い。  
だが、助ける為にはそんな綺麗ごとを言つてる場合ではないだろう。  
フラン、すまない。許してくれ…

「今度は…逃げないでよね?—ゲナイデネ?」

禁忌「カゴメカゴメ」

全方向の弾幕が俺に襲いかかる。  
相変わらず、腕の痛み具合は厳しさを増すばかりだ。  
肉が乾きそうだよ、マジで(・・・)

俺はレプ力を左手に持ち、フランに突撃した。

右腕は激痛が走つて機能しない為、左腕だけで剣を握つている状態  
だ。

チエストオオオオオオ！！

俺は、全身全靈で目的に襲いかかった…

「！… 剣で突撃は予想してなかつたわ」

フランは接近戦を予想して無かつたのか、そのまま俺の攻撃を受け止め、吹っ飛んだ。

しかし…

「あははは、結構痛かつたよ？イタカツタヨ？」

フランは、俺の攻撃を受けてもびくともしなかった。  
刃は鋭いはずなんだが… 威力が足りなかつたか？

俺の渾身の一撃は、フランには全く効かなかつたのだ。

「おーおー（・・・・）」

吸血鬼つて、身体も頑丈なんだな…

俺みたいな人間じやレプカの刃で真つ二つだと思つ。うん

無我夢中で突撃していたせいで、身体の状態を良く見ていなかつた。  
俺は、改めて確認すると…

「うへ、太ももも喰らつてたのか

さつきのフランのスペルカードで、太ももを負傷したようだ。  
肉がむき出しになるほどの傷では無かつたが…

一撃一撃が大きいので、切り傷でも重症になる。

「う、動けるか！？俺！」

やられてはならないと、自分を必死に励ます。

諦めんなよーダメダメ諦めちゃーどうしてやめるんだそこでー  
…修造さんの言葉、こういう時に思い出すと力湧くよな。

「これで終わつこする… オワコニーシテヤル…」

QED…

495年の波紋！！

赤く小さな弾幕は、波紋状に広がつてこぼらに襲いかかつてくれる。  
このスペルカード、一番怖いんだよね（・・・・）

「…遊びのレベルを超越してるんだが大丈夫か？」

悶助は独り言を呴く。大丈夫じゃない、問題だ。

俺は決心した。

「いいで、決めるしか無いな」

悶助はそう言つと、一枚のカードを取り出した。

そして、気力を全て使いカード宣言をした。

溜符：

かめはめ波ああああああああああ！！

A  
M  
1  
:  
3  
3

「うう、負けちゃった…」

「何とか勝つた！」

俺はフランに何とか勝つた。

かめはめ波が決まつたらしく、その前にもダメージを受けていたランには少々きつかったようだ。

：若干涙目になつてゐるフランは、何かかわいかつた。

おつと、本来の目的を忘れていた。  
今なら聞いてくれるだろつと、俺はフランに話掛けた。

「フラン、外に出てみないか？」

「外…？」

「そうだ。ずっと、幽閉されていたんだろ？」

「うん。ずっと、生まれてからここに閉じこめられているの」

生まれてから…か。

フランは、ずっと寂しかったんだな…

「…寂しかつただろ？に。今外に出してやる」

「お姉様に殺されても、知らないよ…？」

「レミリアは、まだフランを見捨てた訳じゃない。…ずっと待ってるんだ、フランを」

「待ってる…私を…」

「フランとレミリアは家族だ。勿論、咲夜さんやパチュリーさんも家族だ。そんな家族であるフランをレミリア達が見捨てる訳ないだろ？」

「家族…私は、家族に入つてもいいの？」

「勿論だ。…今まで、幽閉されて辛かつただろ？けど、もう大丈夫だ。フランは一人じゃない。…お姉様達が、きっと笑顔で迎えてくれるぞ」

「…………うわあああああああああん！…」

フランは、大号泣した。まだ、お姉様達は私を見捨ててなかつたんだ…咲夜も、パチエも…

結局、その日は朝の5時半までフランは泣いていた。泣いた後は、すぐに眠りについた。

眠ってる顔は可愛くて、弾幕ごっこでの疲れが吹っ飛んだような気がした。（＊、＊、＊）

あ、早くニコアに報告しなこと。ニコア、起きてるかな……

AM7：33

ニコアの部屋へ行くと、ニコアは起きていた。

「あ、どうだつたー？」

俺を見た瞬間、肩を掴んで俺に問いかける。

その目は、真剣な眼差しではあったが少し殺氣立つてゐるような感じだつた。

「お嬢様、落ち着いてください。」

「落ち着けないわよー。どうだつたのー？」

あー……

何を言ひても無駄だと想つたので、俺は上手く行つたことを伝えた。

「…と言つて、上手く行つた感じです」

「…良くやつたわ。もん、あなたには感謝の気持ちでいっぱいよ  
「ありがとうございます。フランが起きたら、外に連れて行きたい  
のですが」

「外に連れて行く前に、何か教えてあげなさい。そうね…人間の遊  
びとか?」

「分かりました」

「それよりも、その傷を手当してしないとね。本当、良くやつたわ…

「ありがとうございます(・・・)」

フランがそろそろ起きる頃かな?と思つていたのだが…  
「おひはよー」

AM11:30。

(・・・)…!?

フランが俺の背中に乗つて來た。

…ポキッって音がしたんですが(・・・)

「お、おはよー。フラン」

「ねえねえ、名前何て言つんだっけ？」

「霧雨悶助。もんつて呼んでくれ」

「うん、分かつたつ」

フランの笑顔は、太陽並みに眩しかった。  
レミリアよりも可愛いなあ（ 、 、 ）

「あら、フランの方が私よりもいいのかしら？」

「いいとは言つてませんw」

「んじや、咲夜を呼んで私の部屋で…」

「…何する気ですか。」

「色々」

「フラン、あっちで遊ぼうか」

「うん…」

「あつ、待ちなさい…（フランにも勝つなんて…私ももんに本気  
出しても大丈夫かしら？（笑））」

フラン、嬉しそうだな。

紅魔館に住んで良かつたと、感じる田であつた。

## 1-6話「妖怪の山」

AM9:20

あれから2日。

フランが加わった紅魔館は、活気に溢れていた。フランの笑顔は、見る人を元気にさせると思う。無論、俺も元気付けられている一人だ。

一つ、変わったことと言えば…

パチュリーさんが俺を頻繁に呼ぶようになったことだろうか。今は幻獣の召喚にハマっていて、魔力のある俺に召喚をして欲しいだとか。

因みにラストサバイバー・レプカやSW・ティアダウナーは図書館で保管して貯っている次第だ。

「あ、居た！ もん、一緒に遊ぼ～」

フランが、いつものように背中に乗ってくる。  
…乗る分には軽いからいいんだけど、力が強いからなあ。

「お、フランか。そうだなー 今日は人間の遊びを教えよう  
「どんな遊び！？」

フランがwktkしながら聞いてくる。

小さい頃は、誰だって好奇心旺盛だよな。うん

「かくれんぼ。ルールは簡単、俺が隠れてフランが俺を見つければ勝ちつてことさ」

「なるほどー、んじゃ私が見つける側ね！」

「俺が隠れる側か。うーん、どこに隠れようかな？」

「1分数えるね 60 : 59 : 58 ...」

「楽しそうね。あの一人」

「ええ、とても微笑ましいです...」

「午後から、パチエも混せてトランプしましょうよ。5人で...ね」

「いいですね。みんなでやりましょう」

PM12:35

「じつそつさまでしたー！」

「綺麗に食べたな、フラン

俺はフランの頭を撫でる。

「えへへ...」

「妹様、後でパチュリー様の所へ来て下さい。お嬢様もお待ちしております」

「パチエの所？分かったー」

さて、俺は人里で新たな出会いを求めますか。

「お嬢様、人里へ行きたいのですが」

「何か用事があるのかしら？」

「ええ、ちょっと」

「そう。なら行ってらっしゃいな」

「あー（・・・）」

「え、もんは来ないの？」

フランがつるつるした田で悲しそうな顔をする。  
やめてくださいにフランさん、可愛い過ぎて死にます（・・・）

「ちょっと用事があるんだ、『ごめんな』

「いつ帰つて来る？」

「そうだなー、夕方には帰るよ」

「約束だよ？」

「ああ。夕方には帰るからね」

「つひ」

「.....。」

人里と言つ言葉で、咲夜さんが不機嫌そうな顔をしたけど何でだろ  
う…

疑問に思いながらも、俺は出発した。

俺は人里に着いた。

ほつきのコントロールも慣れてきて、地上100mの高さも怖くな  
かつた。

…もう少し慣れが必要かと思つてたけど、必要無いみたいだな。

俺は来て早々、レミリアのティータイム用のお菓子を買った店に入つた。

「おお、久しぶりだな。4日ぶりか?」

「おっす。今日は、個人的に買いに来た」

「あ、そうだ。お前の名前、聞いて無かつたんだよな。何て言つんだ?」

「霧雨悶助。もんと呼んでくれ」

「俺は東雲戦って言う。しがない商人だ」

戦…いい名前だな( 、 、 )

「宜しく、戦。また訪れるだらつから、その時は頼むな」

「おう。歓迎するぜ、悶助」

そう言って、店を後にした。

…東雲戦、か。覚えておこう。

四方八方を囲む山々。

近くには、小さな川が流れていて河原で子供達が遊んでいる。  
そしておいしい空氣。

…あれ? じーじーだつけ?

「あのー」

「……」

「あのー」

「……」

「あのーつーー!」

「(、 、 )ーー! ?」

おお、何だ何だ! ? とびっくりして振り返ると…

緑色の髪に、蛇と蛙の髪飾りをしている女性。

あ、この人 。

「もう、反応が遅いですよ! ?」

そこには人里で以前会った女性、東風谷早苗さんが立っていた。  
俺の反応が遅れたせいで、怒りに頬を赤く染めながら此方を見つめ  
ている。

「反応が遅れてごめんな。景色に見とれてたものだから…」

「全く……あ、そんなことよりも以前の話、覚えてあります?」

以前の話……ああ、神社に連れて行つてくれるとかなんとか。

「神社に連れて行つてくれるんだっけ?」

「はい。もんさんが飛べると案内が楽なんですが、飛べますか?」

「ほうきを使えば飛べるよ」

「本当ですか!?」

早苗さんが顔を近付けて来た。

何だらう、レミリアとは違つて少しへキドキするな。

……まあ、体格的に俺と同じ年頃だからだろうけど、…………

「と、とりあえず離れたらどうだ?」

「あー? すみません、つい……人間で飛べる人は珍しいので」

「そつか。なら神社ままですぐ行けるよな

「はい! 行きましょう」

PM14:28

現在、俺は妖怪の山、と言う所を飛行中。  
名前の通り、物騒な山らしいです。はい

神社は、この妖怪の山の頂上にあるらしい。  
何か、山の頂上にある神社って想像出来ないな。うん

俺は、妖怪の山を地上120mまで上昇し、見渡してみた。

妖怪の山の木々は、緑色の葉から黄色の葉に色づいていて、良く見てみると滝も確認出来た。

何て言うか、日本の秋よりも美しく見えるような気がするな。

「神社が見えてきましたよー」

「何か、大きい神社だな」

大きい神社にしては、妖怪の山と自然に溶け込んでいた。

違和感仕事しろ（ 、 、 ）

「はい。注連縄がありますでしょう？あれ、一七もあるんですよ」

「ほうほう？」

「それでですね…」

早苗さんは、神社のことになると途端に話が弾む。

…それほど、あの神社が好きなのかな？

そういう話していくうちに、俺達は神社の鳥居まで飛んでいた。

…何か、鳥居と言えば嫌な記憶しか無いな。

PM14:47

神社の鳥居には、見慣れない女性が居た。…幻想郷の超人達の中に男は居ないのか？

「此方に霧雨悶助さん、と言つ方はいらっしゃいませんか？」

俺を探してゐるのか？

その女性に、俺は声を掛けた。

「あのー」

「ひやつーー？」

黒い翼を生やしてゐる女性は驚いてカメラを落としてしまった。  
…何か、びっくりさせちゃったな。

「あ、びっくりさせでごめんなさい。霧雨悶助なら俺です」

すると黒い翼を生やした女性は…

「あやややや、あなたが霧雨悶助さんでしたか！　早速、あなたを  
「ダメです」

「？」

「むむむ…仕方ないです。あ、悶助さん。私の名前は射命丸文と  
申します。以後お見知りおきを」

「悶助ではなく、もんと呼んで頂ければ幸いです」

「分かりました。では失礼しますねー、もんさん」

文さんは、そつまつと博麗神社の方へと飛んでいった。

「何か、天狗みたいな女性だつたけど、カメラ持つてたな。  
流石に幻想郷でもカメラはあることに安堵した。

「ふう…思わぬ邪魔が入りましたね。改めてここが守矢神社、で  
す」

「守矢神社か。覚えておこづ」

「後この神社の神様である人を紹介しますね。ついて来て下さい」

ついに、こここの神社の神様と対面する時が来たようだ。  
少し緊張するな…

でも

ガンキヤノンとか口リ神とか言われる神様ってどんな容姿をしてる  
んだろうなー。

見てみたい気持ちはある（ 、 、 ）

俺は若干好奇心を持ちながら、神社へと入って行くのだった  
…

## 17話「神々と俺」

俺は早苗さんの家に上がらせて貰つた。

洋室は無く、和室が4部屋程度ある。

キッチンも整つていて、炊飯器と薪があるので確認出来た。

… 霊夢さんの神社よりも綺麗で広いな（・・・）

「広い…」

「広いですか？」

早苗さんは俺に対して疑問を持つ。

いやいや早苗さん、4DKですが4DK。

「広いよ。俺に取つては広いさ」

「へえ… 私はあまり広く無いと思ひけど…」

4DKだよ4DK。

大事なことなので（『y

「ほつ」

「（J）に神奈子様と諏訪子様がいらっしゃいます」

神奈子と諏訪子と言つのか。

誰と言う疑問よりは、初めて知つた驚きの方が大きい。

名前から察して、ガンキャノンは神奈子さん、口リ神は諏訪子さん

かな？

「では、開けますね」

遂に対面だ：

俺の心臓は期待と緊張が交錯し、バクバク鳴っている。

：もちつけ俺（・・・・）

PM15:49

「神奈子様」「諏訪子様」紹介したい方がいらっしゃいます

「お、誰誰？」

「お、男じゃないか！早苗、あんた…」

「ちょ、違いますw」

そこには、背中に注連縄を付け赤い服を身に付けていて、胸元に鏡  
みたいな物を付けている人と

帽子を付け紫の服を身に付けていて、ニーソを穿いている小さな  
幼女？が居た。

「は、初めまして。霧雨悶助と言います  
「あんた、何者だい？まさか、彼氏とか言つんじゃないだろ？  
？」

：彼氏で（・・・）

威圧的な態度を取る神奈子さん。これを神の威厳と言つのか？

「だから違ひますって…」

早苗さんが頬を赤く染めながら神奈子さんに對して怒る。

「悶助くんと言つうのね。私は洩矢諏訪子。神よ

諏訪子さんは神奈子さんみたいに警戒はせず、普通に接してくれた。  
…神奈子さんは十分親しめそうだ（・・・）

「改めて俺は霧雨悶助と言います。もん、と呼んで下せー」

「もん、ね。分かったわ」

すると諏訪子さんはニコッとしてから、俺を軒先に連れて行つた。  
何か、話でもあるのかな？

一方、残りの二人は…

「…分かつた。彼氏じゃないんだね？」

「…はい。」

早苗の説得により、神奈子の誤解は解けたようだ。

「悶助、だつたね。誤解してすまなかつた…つて、居ない」

「さつき諏訪子様と一緒に軒先へ行きました」

「諏訪子と…まさか、幼女趣向とかじや」

「もんさんはそんな人じやありません」

PM16・12

俺と諏訪子さんは軒先で一人で座つている。  
話でもあるのかな?

「ふむふむ… そつかもん、か…」

諏訪子さんは一人言を喋つている。

「あの、諏訪子さん? 何故俺をここに…」

「何となくだよ。男を見るのは久しぶりでさ」

久しづりか…

人里に行けば男なんていつぱい居ると思ひナビな。  
ほい、戦とか居るし（・・・）

「なるほど」

「そして君に興味が沸いたのも一つ…かな」

「…答えられる範囲内なら、何でも答えますよ」

俺は無意識に諏訪子さんの頭を撫でていた。

気付いた頃には、頬を少し赤く染めて驚いている諏訪子さんが居た。

「あ、ごめんなさい… 無意識で撫でてしましました」

「ううん、いいよ。…普通に嬉しかったし」

「え？」

「何でもないよ」

「諏訪子様ともんさん、あんなに仲良くなつてね…」

「やっぱ幼女趣向じやないか」

「もんさんはそういう人じやないって何度も言つたら…」

早苗さんは溜め息を付きながら一人の様子を見ている。

「早苗も仲良くなつたらどうだい？彼氏とか婿は認めるが」

「諏訪子様よりは先に仲良くなつてますよ。けど仲の深さは諏訪子

様に……

「負けたると」

「はー……」

早苗さんは少し悲しそうに神奈子さんに話掛けた。

「まさか、早苗あんた悶助のこと気になつてるのかい？」

「えー？ や、そんな訳なこじやないですかっ」

「ほほほ……さてどうかねえ……」

PM18・26

俺は一通り諏訪子さんからの質問を答え、そろそろ帰らうとしてたのだが……

「え、帰つひやつの？」

諏訪子さんは俺の手を掴み、悲しそうな顔で見つめる。

… フラン並みにかわいいなあ ( 、 )

「ええ、紅魔館に帰らないと怒られちゃいますので」

「… そつか。あ、今度から諏訪子、って呼んで。いいから  
「分かりました」

「あ、もんさん。お帰りですか？」

早苗さんと神奈子さんが、俺を見送りに来てくれたようだ。

「うん、もう帰らないと」

「あー…悶助。さつきはすまなかつたね」

神奈子さんが申し訳無さそうに話掛けてきた。

「気にしていませんよ。後、もんと呼んで頂ければ幸いです」

「分かったよ。後自己紹介が遅れたね、私の名前は八坂神奈子だ」

「改めて霧雨悶助です。」

「ご飯とか食べていかないかい？」

「いえ、帰らないと怒られるので、遠慮させて頂きます」

「それは仕方ないね」

「あ、もんさん！…また、来てくれますか？」

「うん、近いうちにまた来させて貰つよ。それじゃ、色々ひなり」

今度は、じ飯食べさせて貰おうかな？

三人に見送られながら、俺は帰つて行つた。

俺は今、紅魔館の二階に潜伏中。

咲夜さんとかレミコアとかフランとかに見つかっちゃったら…

「あー？ 前の侵入者！」

「待て待て（。 。 。） もう俺はここに住むことになつたんだ

よ

妖精メイドは警戒を緩めない。

勘弁してくれよ（、；；；）

「何事よ… つてもん。 いつの間に帰つてたの？」

（。 。 ）！？  
うう、バッドタイミング。  
不幸だ。

「今さつき… です。」

「妹様とお嬢様がかなり怒つてたわよ。 無論、私も（> > #）」

「うわああああ（、；；；）」

「あつ！？ 居た！ もん、遅い！…！」

そこにフランもやつて來た。

おこおい、マジで勘弁してくれよ。

「フラン、これは訳があつてだな…」

「…いいから、謝つて。」

フランは鬼のような形相で俺を睨む。

…レミリアよりも怖い（、・・・・）

「いのん…なれこ（・・・）」

「妹様、今日はどうなさりますか」

「うーん… 気が済むまで遊んで貰おうかな〜

」

次からせ、いや とヒタ方に帰る。  
そうしてハ。

やつらから思ひ出すった。

## 1-8話「白玉楼の住人」

AM 8:47

いつも通りの朝。

俺は紅魔館で今日も通常業務をしていた。

「あ、もん。あなたに話したいことがあるのよ」

何だらう、レミコアを久しぶりに見た気がする。

俺は久しぶり? だつたのでレミコアをしばらく凝視していたが…

「…? 何よ、もん。じろじろ見て」

「え? あ、すみません。お話があるんでしたね」

「そ。ほら、早く行くわよ」

俺の手を掴み、少し早歩きで歩くレミコア。

…手繋ぐことは、抵抗無いのな(・・・)

「さて…もん。あなたに行つて欲しい場所があるわ

「何でしちゃ?」

「白玉楼に行つて欲しいの。案内は咲夜がしてくれるから、大丈夫

よ

どんな所なのだろうか。

白玉楼?

悶助は若干氣になりながらも、レミコアの願いを了承する。

「ええ、分かりました。行きます」

「…ありがと。」

レミコアは俺に笑みを見せる。

フランと言ふ諷訪子と言ふレミコアと言ふ、やつぱ二人とも可愛いやあ（＊、＊、＊）

「お嬢様の頼みですから、引き受けるしかありませんよ」

「あら、なら何故吸血は引き受けないのかしら?」

やつぱり来ましたこのパターン。

俺は慣れてきたので速攻で言ふ返す。

「それとこれとは話が違います（、・・・）」

「な、何よそれ!? 私の頼みなら何でも引き受けれるんでしょ!」

う、自分の失言が痛い。

悶助はめんどくさくなると思い、レミコアの元から疋早に去った。

「あー? 逃げるのね? ふふふ、いいわよ。今日の夜覚悟してない!」

俺は食事を取つた後、咲夜さんの元へと急いだ。

「咲夜さんー 大事なお話があるんですが」

「…………」

咲夜さんは答えない。どうしたんだろう？

俺は何かあつたのかと思い、開いていた部屋に入る。

「咲夜さ… っ （。 。 ）！？」

そこには、まだ下着の状態でメイド服にお着替え中の咲夜さんの姿が。

スタイル抜群ですな。これは素晴らしい

「……THE WORLD。時よ止まれ」

幻葬：

夜霧の幻影殺人鬼！！！

俺はボロボロの状態で正座させられている。

「俺も悪いけど、咲夜さん何で答えなかつたんですか（・・・）」

「…謝らないとまたボコるわよ」

「『めんなさいマジ』『めんなさい』（・・・）」

「あ…で、何の用なのよ？」

咲夜さんは呆れた様子で此方を見ているが、頬を真っ赤に染めてい  
るのは氣のせい…じゃないな。

下着を見られたからそりや恥ずかしいよな、と思いながらも俺は本  
題に移す。

「はい、お嬢様のお願いで白玉楼に連れて行って欲しいんですが」「  
お嬢様のお願い？…分かつたわ。連れて行ってあげる」

⋮

咲夜さんは、時間を止めて俺を白玉楼まで連れて行ってくれたよう  
だ。

咲夜さん、ありがとう。後ほど「めん（・・・）

辺りは、白い霧で包まれていて目の前には門が見えた。

それにもしても、随分と寒い場所に来たもんだとしみじみ感じる。

「あ、普通に開いた… お邪魔します（・・・）…」

門は開いていた。

重そうな門だつたのに、いつも簡単に動かせてしまった。

…実は軽かつたりするのか？

慎重に入つて行くと、地面はやがて砂利道へと変わった。  
霧も門を閉めると無くなり、辺りを見渡そつとした刹那。

俺の頬に、鋭く尖つた感覚の痛みが走つた。  
何者だ？剣でも持つてゐるのかな。  
俺は警戒を強め、スペルカードを用意する。

「私の剣に、斬れないものなどあまりない！」

……どこから聞こえて来るんだ？

警戒を強めるが、辺りには誰も人は確認できない。

……分からぬから正面でいいよね！

溜符

かめはめ波！！

PM13:45

目を開くと、また見慣れない天井。  
俺、最後何してたんだっけ？

「あら、起きたわね～」

そこには、@が付いた帽子に、桃色の美しい服を身に付けている女

性が座っていた。

後ろには、魂が幾つかふよふよと浮遊している。

「この女性、亡靈か？」

「あの、俺は一体…」

「妖夢と相打ちになつたのよ~」

「妖夢？」

「誰だ？まさか、あの門の付近で戦つた…

てか、俺死んだかと思つてた（・・・・）

本当に正面から突っ込んで来るとは思いもしなかつたが、生きていることにとりあえず安堵した。

「幽々子様？ 何故侵入者を保護したのですか？」

すると、白髪で緑色の服を身に付け、剣を二つ帯刀している少女が俺を睨みつけながら入つて来た。

服の部分部分に穴が開いていて、髪もぼさぼさになつていた。

「俺、この女性にかめはめ波撃つたのかな？」

「あ、紹介が遅れたわね~ 私は西行寺幽々子。亡靈よ いっしが魂魄妖夢つて言う半人半靈で半人前の剣士なの」

侵入者の俺に、優しく紹介までしてくれる幽々子さん。

…「靈で、優しいのかな？」

「幽々子さんと妖夢さんですね。俺は霧雨悶助と言います、もんと呼んで下さい」

「無視しないで下さい… もう…あ、そこの人間」

半人前の剣士と薙つ少女が、此方に近づいて来る。

「何ですか？」

「もんと言つたな？侵入したからにはここで斬つて成敗してくれる！」

えええええ！？（。 。 ；）  
俺の人生ここでオワタですか。そうですか。  
いやいや、ここで死にたくないっす。

「あ、よーむ。もんに危害加えちゃダメよ、決闘なら今やらせるか  
いら

幽々子さんがひょっこり出てきてくれたお陰で、命拾いした…  
でも、最後の言葉は聞き捨てならないぞ、おい（、・・・）

「決闘をやるのはいいですが……私が絶対勝ちますよ？」  
「分からぬわよ……この子、何か力を持つてるもの」

幽々子には見えたのだ。

……悶助の体から魔力が溢れんばかりに流れているのが。

「能力なら一応……魔法と空間を操る能力がありますが」

空想上のものを実体化する能力もあるが、あえて言わないでおいた。

「あらあら、よーむより格段に強いわよ～」  
「だ、大丈夫です！たかが人間ごときに、私が負けてなるものです  
か！」

決闘をする前に、俺と妖夢は刀がしまつてある倉庫へ向かっていた。  
武器を貸してくれるとのことだったが……

「……」  
「……」  
「分かりませんか？刀ですよ」

妖夢は溜め息をつきながら話掛けた。

「いや、刀なのは分かるけど」

妖夢に対しては何故かタメ語で話してしまつ為、タメ語で話すこととした。

「刀も持たないと決闘ではありませんからね」

…ティアダウナーとか持ってくれば良かつたなあ。  
悶助は少し痛いことをしたと後悔する。

しかし、鉄刀も嫌いじゃないのは事実だ。  
このシンプルなデザインが…イイー（・・・）

「…何ぼうつとしてるんですか？ 行きますよ」

「あ、うん」

俺は、妖夢と決闘と言ひ名の死合にすることになった。

## 19話「剣士と剣士」

妖夢から鉄刀を貸してもらつた俺は、決闘をする裏庭へと向かっている。

途中、妖夢の様子を窺うと表情は堅く真剣なものだった。  
真剣なのは十分伝わるが、その…背が小さいから子供っぽく見えるのだ。

相手は素人じやないのは分かつてはいるんだけどね（・・・）

「…何ですか？その子供を見るような眼差しは」「え？ああ、妖夢がそう見えたのならごめんな」

急に話し掛けられたが何とか取り繕つことは出来た。ふう…

「幽々子様を連れて来ますので待つて下さい」  
裏庭に着いて早々、妖夢はそう言つと表庭の方へと姿を消していった。

裏庭を見渡すと、表庭の3倍程度の広さがあった。  
土には雑草が抜かれた痕が残つてゐる。一応、手入れはしていることは分かるのだが…

…門の手前より寒いような気がしないでもない。

幻想入りした日は確か冬の寒い日だったな。幻想郷も冬なのかな？

「お待たせしました」

「お待たせ～」

そこへ幽々子さんと妖夢が帰つて来た。  
とりあえず、今日は何月何日か聞いてみよう。

「あの、一つ聞きたい」とがあるんですねが」

幽々子「なーに？」

悶助「今日つて何月何日ですか」

「12月26日だつたわよねー 妖夢？」

「はい、その通りでござります」

…やはりか。

俺は幻想郷でも冬だと知り落胆する。

こんな寒い所で、決闘なんて何を考えているんだ…（ 、 、 ）

妖夢は半袖にスカートで、大丈夫なのだろうか?  
妖夢は身震い一つもせずただ平然と立つている。

「私と妖夢は靈だから冬でも寒くないのよ～」

「そ、そうですか。安心しました」

心を見事に読む幽々子さん。

表情に出てるのか？それとも本当に心を読めているのか？

…多分、前者だろうな（ 、 、 、 ）

「それよりも、早く始めましょうよ。決闘」

「そうですね。では、位置について下さいもんさん」

「分かつた」

PM14:30

妖夢と俺は定位位置に付き、お互の距離も一定にした。  
俺は寒さに身震いしながらも、鈍く光る鋼の刀を抜く。

重さはデュエルソード並で振れる分には振れる。

俺よりも双刀を抜き構えている妖夢は大丈夫なのだろうか?  
双刀となると、重さも伴つてくるはずだが…

「妖夢」

「何ですか?」

「重くないのか? その刀」

「ああ、刀ですか。二つで5kgですから全然軽いですよ」

…え? 5kg?

いやいや妖夢さん、それは全然軽くないでし

「妖夢は普通の人間よりは力持ちだから大丈夫よ」

「心配する必要は無かつたみたいですね」

「それよりも早く、早く。」

「では…魂魄妖夢、いざ参ります！」

先手は妖夢だ。

妖夢は高速で間合いを詰め、距離を一気に縮めて行く。

一方、俺は防御体勢に入った。

高速で一気に間合いを詰められては、対策をすぐに練られないからだ。

「後は…受け止めるだけだ」

ガキン！――

刀と刀の衝撃が、裏庭に響き渡る。

「あらあら、妖夢の一撃を受け止めるなんてやるわね～」

あくまで人間としてはやると言つ意味だが、幽々子は感心する。

「感心するなんて珍しいわね、幽々子？」

そこに隙間妖怪こと八雲紫も見物人として俺たちの決闘を見に来たようだ。

「まあね～あの子の能力は桁外れだから

「流石は私の子だわ」

「え、紫が取つてたの？あの子」

「ん…まあね」

「受け止めるとは…人間としてはやるようですね～」

「それは…どうも。」

刀と刀はまだギリギリと尋めき合つてゐる。

何だ、この今までに無い重い衝撃は。

今にも寒さに手が凍りつきそうだといふのに、これはまずい状況だ。

「それでは…これはどうぞ…」

妖夢は再び定位置に戻った後、意識を集中し始めた。

「一体、何が起こるんだ…？」

「妖夢はスペ力を使う気ね」

「スペ力に頼る所がまだまだ半人前なのよ～」

「そうね。妖夢相手だし悶助くんも勝機は十分にあるでしょう」

「はっ…！」

妖夢は俺との距離を少し縮め、そして…

人符…

現世斬！！

妖夢の刀の一つが緑色の鋭い刃へと変わり、俺目掛けて振り下ろして来た。

「ちょっと…？　いきなり過ぎるだろ　（。。。；）」

ただ、直線的に刀を振り下ろして来たので容易に避けることが出来た。

斜めに振り下ろして来たら、俺は攻撃を喰らつていただろう。

「くつ…スペカまで避けるとは」

「さつきのはまぐれだよ」

「ですが…次は逃がしませんよ」

人智劍…

天女返し…!

妖夢は一回垂直に刀で斬ったかと思つと…

更に下から上に刀を斬り返して、俺の方目掛けて鋭い刀の刃が襲つて來た。

「こんなのアリかよ…」

俺は予想して無かつた事態に全く動けず、もうに攻撃を喰らつてしまつた。

脇腹と左腕の一部を負傷し、俺は跪く。

脇腹は皮膚を切り裂き、やがて血がポタポタと滴り落ちる。左手は酷く、真皮の付近まで傷が食い込んでいる。

痛みを越える、想像を絶する痛みである。

「決まつたよ、うですね」

「…そのよう…だな」

「では…」これで終わりにしてあげます

「やつぱり、無理があつたかしら」

「いや、悶助くんはこれから力を發揮するわ。良く見ときなさい」

「まだ…諦めた訳じゃない」「命乞いをするなら今ですよ」「…すまないが、断固拒否する」「何を…っ！…？」

悶助の鉄刀が突然変異を起こし、光に包まれていく。妖夢はこんなことが起きるのか、と言いたそうな驚きの顔をしてい

る。

何なんだ、これ（、・・・）

突然変異が終わり、刀を確認してみる。

刀は鉄刀よりも少し長くなり、鞘は青色に変化していた。

試しに、不意打ちと称して妖夢田掛けで斬る。

ショパン…

PM16・47

俺は何故か布団で再び寝ている。  
あれ、俺何してたんだっけ。

決闘だつたよな？負けたのか？それとも…

「起きた？もう…一時間も寝てたのよ？」

紫さんの声が、後ろから聞こえてくるのだが…

「何で同じ布団で寝てるんですか

「私の子だから当たり前でしょ？」

「さいですか」

「俺は紫さんの発言を軽く流した。

だって、頭痛いし腹痛いし（�）

「軽く流すなんて酷いわね」

「今頭とお腹が痛いので、とても話せな……」

「えいっ」

紫さんは俺の発言を無視して思いつきつ抱きついて来た。

嬉しいけど、抱き締める力が強いのなんの…

胸やべえ（＊＊＊）なんて言つてゐる場合じやない。

「あら…少し、力が強すぎたわね」

紫さんは、力を緩め優しく抱き締める。

暖かくて、眠りそう…

「出来れば、離れて欲しいんですけど…」

このまま寝つたら幽々子さんや紫さんご迷惑を掛けるので、離れる  
よう懇願する。

「話はすぐ終わるから、このままで話をさせてもいいわ」

すぐ終わるなら、と俺は耳を傾ける。

「あの鉄刀のことなんだけど… あなたにしか扱えない代物になっちゃつたから、持ち帰ってくれない？」

「？ あの刀がどうかしたんですか？」

「ええ。空間を斬る刀、まさしく「空間刀」に突然変異したのよ。

何故かは知らないけど」

空間刀？

あの鉄刀が突然変異した時に出来た刀か。

とりあえず、すごい刀貰う」とになるんだな俺（＊、＊、＊）

「はあ。分かりました。では…俺、帰り…ま…す…」

ダメだ、眠気が…

俺はそこで意識を落とした。

12月26日

PM21:51

俺は目を覚ました。

ここはどこだ? 見覚えのある部屋に見えるが…  
紅い洋風の壁に…つて。

いつの間に俺は紅魔館に帰つてたんだ(・・・・?)

まあ、帰れたから良しとするか。

…しかし、白玉楼の一戦を終えた後は、殆ど記憶が無い。  
残つてるとすれば、紫さんの中で眠つてしまつたことだけだ。

「起きたわね。具合はどう? 左手が酷かつたけど…」

首を横に向けると、そこに心配そうに見つめる咲夜さんが居た。

「左手はまだ痛みますが、他は大丈夫ですよ。体調も悪くありません

ん

左手は真皮まで剥けたこともあって仕方が無い。

わき腹は…切り傷程度で済んだみたいで、傷口は瘡蓋が早くも付いていた。

「そう。左手以外は痛くないのね?」

「はい。この通りです」

俺は足や右手を前後に動かした。

「良かつた」

咲夜さんの様子を見ると、本気で心配していたことが伺えた。

…嬉しいんだけど、何か妻が怪我した夫を見舞いに来ている感じだな。

「心配かけてすみません。本気で心配してくれてたんですね」「家族だから、当たり前でしょ？」

そうか。咲夜さんも、俺を家族として認めてくれてたんだな。

「家族、か」

「…あ。 そりそり、紫から伝言があつたんだわ」

ハセガワの文庫

「ええ、言い忘れてたけど何であなたがここで寝てるかはあなたまで運んで来てくれたからよ。紫がね」

「……それが、紫さんがあれわざ俺をここに呼んで……」

「……それで、伝言とは？」

「少しだけでもわかるか？」わね？

少女説明中…

本当に長かったので要約してみた

- ・妖夢に勝つた
- ・妖夢がリベンジしたいらしい
- ・空間刀貰った
- ・幽々子さん「また来てね~」
- ・血祭りに上げてやる
- ・キングクリムゾン！
- ・紫さん「今度うちに遊びに来なさいな」
- ・汚ねえ花火だ…
- ・よろしい、ならば戦争だ

…何か、ネタが入り乱れてて伝言が（、・・・）

とりあえず明日田玉楼へ向かおうか。人里にも行こう。うん

「今日から3日はゆっくり休みなさい。どこか逝くなら逝けばいいわ」

あの、行くと言つ言葉が違つよつた気が…

「あ、ありがと「ひざこます」  
「んじや、失礼するわ」

咲夜さんはその場から一瞬で消えた。

俺も、瞬間移動とか出来れば妖夢にも…（・・・）

PM23:20

少し遅めのお風呂。

左手を袋で覆い、お湯に浸からないように注意する。

お風呂は、街の銭湯並みの広さがあった。

サウナは流石に無いか。

勿論、ジャグジーも無いし掛け湯も無かつたが、十分だった。

「うほwww 気持ちいいなおいwww

温泉でも引いてるのだろうか？

幻想郷でも引ける所は有りそうだが…

バタン!!!

(。 。 ) … ! ! ?

「わあーい、お風呂 お風呂」

「妹様、お風呂では暴れなこよひ…（。 。 ）…・・？」

「いつもようちゅうと遅めのお風呂ね…って

「…お風呂お風呂お風呂…」

悶助「えつ」

何故入つて來たし。

やばい、咲夜さんに殺られるな。いい人生ダッタナー

俺は、一瞬身が固まつた。

これは、混浴つて言うんだっけ。初体験ですか（・・・）

「出たらアグーシャインで身体燃やすわよ」

ひえええ（・・・・・）

何てことを言つたんだこのもやし……いや、紫もせ（・・・）。

「…何か失礼なこと考えなかつた?」

「考えてませんよ」

「パチュリー様、流石にそれは…」

「私はもんと話したいだけよ」

「パチエの話終わつたら私に貸してね～」

「いいわよ」

俺は物扱いか。

いつして、紅魔館の夜は更けて行くのであつた…

（ 俺がフランの手に渡つてからどうなつたかは（想像にお任せします）

今日は遅めの起床。

休みなので早速人里へ…と思つたのだが

「あら、ビニカお出掛け?」

レミコアさんおっすおっす。

「ええ。人里と白玉楼へ行こうかと」

「（また人里…何があるって言つの？）」

「あの…お嬢様？」

「し、仕事はどうしたのよ！まさか、サボるとかじや」

「咲夜さんに聞けば分かりますよ。」

俺は着替えをしながらレミリアに話す。

あれ、咲夜さんから話聞いてないのかな？

「咲夜ー！咲夜ー？」

レミコアが探しているうちに、俺は空間刀を持って空へと飛んだ。

「おつす戦」

「久しぶりだな！悶助よ」

「あれ、品数増えた？」

そこには、フ ラムネやポツ 一などが所せましと並んで居た。  
現代のお菓子だと！？

これは買ひ占めるしかない……って、お金に難があつたな。

「うちの娘が守矢の姉ちゃんから貰つたんだよ」

「ああ……早苗さんか」

早苗をなんなら理にかなう。現代っ子だからなー

「買つて行くか？」

「んじや、ポツ 一5箱頂戴」

「はい、1円な

「1円？」

「1円で。この時代の一円つて一体何円なんだ。

「1円持つてないんだ。5円でいいか？釣りはいらぬぞ」

「マジか！？」「

戦が目を光らせて俺に言つ。

そんなに価値あるなり、100円持つてゐるだけで大金持ちだなあい。

「ああ。んじや、じゃあな戦」

「恩に着るぜ悶助！？」

こんなに感謝されるとは思つても無かつたな。

PM12：06

暫く白玉楼の道を進んでいると…

「人間か？白玉楼は危ないから気を付けろよ」

そこに、白色の長い髪で、赤色のオーバーオールを穿いている女性が居た。

「あなたは？」

「藤原妹紅。蓬萊人さ」

妹紅さんと言つらしい。蓬萊人で、かぐや姫と同じか。  
後、不老不死だっけ。

「俺は霧雨悶助と言います。もん、と呼んで頂ければ」「もん、か。分かった。また会つた時にはよろしくな」「はい、よろしくです」

そう俺が言うと妹紅さんは、竹林の方へと去つていった。  
また会つた時は、色々聞いてみたいなー（＊、＊、＊）

俺は白玉楼へ着いた。

妖夢に斬られる可能性があるので、空間刀を構え慎重に入る。

「警戒しなくていいわよー 妖夢なら庭に居るから」

幽々子さんが、俺の警戒を解くよつと出迎えてくれた。  
とりあえず、一安心だな…

「以前の決闘では熱くなってしまい、すみませんでした

部屋に入ると、深々と頭を下げる妖夢が。

俺、こういうの慣れてないぞ(・・・)

「いやいや、もうこいよ。頭を上げてくれ

「どうぞ、私に罰を…」

このままでは埒が開かない。はあ、仕方ないな…

「え…？」

俺は妖夢の頭を優しく撫でる。

説得よりは行動する方が早いと思つたからだ。

「妖夢つてあだ名とか無いんですか？」

「そうねー みょん、とか呼んでたような気がするわ」

「幽々子様… あう

妖夢は頬を赤く染める。本当、子供みたいだな。

「んじや、みょんでいいか？」

「え…？ は、はい…」

渋々了解、と言つた所のようだ。みょん、か。いいあだ名だ。

「では、帰ります」

「え、もうですか？」

「もう少し居ても良かつたのにね~」

「もう少し居たかったんですが…すみません」

まあ、これと云つて急いで無いのだが…

また決闘は避けたいので早めに帰ることにしたのだ。

「…また、来て下さいね」

「今度は妖夢が料理作って待ってるわよ」

「マジですか（・・・）楽しみにしていますね。では…これにて」

妖夢と幽々子さんに見送られながら、俺は白玉楼を後にした。

妖夢の料理、楽しみだなー（\*、\*、\*）

PM15:40

漸く人里に着き、また戦の所へ向かおつとしたのだが…

「あ、お久しぶりですもんさん」

「おー 早苗さん…諏訪子？」

何日ぶりか分からないが、早苗さんと諏訪子に再会した。

買い物に来たのかなと思つてみると…

「やあ、久しぶりだね」

諏訪子が、俺の腕を掴んで腕組みをする。

早苗さんは、何か思考停止してるな…大丈夫か？（・・・）

「だ、大丈夫ですよ。羨ましくありません」

「バレバレだよ～」

「何が？」

「何でもありません！」

早苗さんは、神社の方へ少し焦りながら飛んで行った。  
何か、怒ってたような気がする…今度、謝ろう。

「あーあ、行っちゃったよ…でも、これで一人っきりだね？  
「そ、そうですね」

人里の中心だったので、人々の注目を浴びる。  
諏訪子は、何をする気なんだろう（・・・）

「デート」

「ええ！？」

「冗談だよ【冗談】」

あの、冗談の田じゃないんですが。

そう思つた理由は、諏訪子の瞳が真剣そのものだったからだ。

「お、俺帰ります！（・・・）」

「これはマジだ。」

逃げるしか無い。

俺は魔力を使って空に飛び上がり、博麗神社へと飛んで行くのであつた…

「あー、行っちゃった。…でも何か、あの子違うのよね。他の人と」

21話「魔法使い達の集い」（前書き）

アクセス30000PV越えたかな？

見てくれてる人には感謝、感謝。（＊、＊、＊）

## 21話「魔法使い達の集い」

AM10:01

今日は12月28日…だけ。多分12月28日です。

大晦日まで後3日…

幻想郷の超人達は、大晦日と言つものを知つてゐるのだろうか?

俺は布団を片付けようと起き上がつた。

が…

「そ、寒つーうー、布団布団（・・・・）」

昨日は暖かつたのにな。

妙に寒いので、早く布団に入りたい気持ちを抑えて窓を開けてみると…

一面銀世界。

つまり、大雪である。

なるほど、大雪なら道理で寒い訳だ。

日によつて、寒暖の差が激しいのは幻想郷でも同じのようだ…

でも、大雪でも門番をしている本みりんさんが心配だな。

俺は、後で本みりんさんと会つて会つた。

紅魔館の大時計は11時を指している。  
大雪なので、气温は上がる筈も無く外からのかき氷がひしひしと伝わ  
つた。

「あの、本みりんさん」

「…………」

本みりんさんの元へ向かつた俺は今門に居るのだが…

寝ている。

こんな大雪でも寝ているのだ。

おいおい…と衝撃的だったのはさて置き

これは風邪を引くな、と思つた俺は本みりんさんを本館へと連れて  
行つた。

……

「あれ、此処は…」

「起きましたか？本みりんわん」

本みりんさんは幸い風邪を引いておらず、俺は一つため息を付いた。

「本みりんじやありません！紅美鈴<sup>ほんめいりん</sup>です！…」

本みりんではなく、めーりんさんと書ひよつだ。  
何か、誤解してたようで悪いな（・・・）

「（めん、漢字の読みが分からなくて…」

「あー、そういうことですか。では、これからは美鈴と呼んで下さ  
いね」

美鈴は俺に優しく微笑みかける。

「ああ。…そういえば、俺の名前を教えてなかつたな。俺は霧雨悶  
助だ」

「はい、それでは悶助さんでいいですか？」

「もん、でいいよ」

靈夢さんに付けて貰つた渾名

。

初めて付けて貰つた渾名は、呼んで欲しくて堪らない。

いつこいつ時は、呼んで欲しくてつい笑顔になってしまつ。

「は、はい。もんさんでいいですか？」

「うん、頼むよ」

「もんさん…嬉しそうな顔してますね」

「靈夢さんに初めて付けて貰つた渾名なんだ。だから…」

何だらう、めーりんと居ると落ち着く。  
本音を言える気持ちになるのだ。

物腰柔らかな雰囲気だからだらうか…？

俺は、久しぶりに落ち着けたせいか、しばしの眠りに付いた…

PM13：24

「起きた？」

俺は仮眠をして起床。

周りを見渡すと本棚がある。ここは図書館だと判断は付いた。

膝枕をしてくれてるのは…パチュリーさん？

「パチュリーさん？」

「起きたのね。それじゃ、外に出るわよ」

外？

大雪の中外出するなんて、パチュリーさんの気がしれないな…

あ、美鈴はどうに行つたんだろう？

「美鈴を気にしてくれてたのね。あの子は風邪を引かないから大丈  
夫よ」

パチュリーさんが察してくれたようで、クスッと俺に微笑む。

「めーりんと言い、パチュリーさんと言い…  
笑うとかわいいじゃないか。（ 、 、 ）」

とりあえず、風邪を引かない身体と分かつた俺は安堵した。

「で、外に出るって…」

「外出なんて珍しい」と、ビックリ行くのかしら？」

そこへレミコアと咲夜さんがやつてきた。

二人ともコートを着ていて、防寒対策をしているようだ。

「魔理沙の家よ。もんと魔理沙、関係ありそだから」「

魔理沙のことを思い出した、とは言わず黙つておいた。  
ここでは話すよりは、行つてから話した方が吉だ。

「気を付けていらっしゃいませ、もんとパチュリー様」

咲夜さんが少し心配そうな顔で俺達に話掛ける。

「ええ、行つて来るわ」

「心配しなくて大丈夫ですよ。魔理沙の家に行くだけですか？」「早く帰つて来なさいよ！遅かつたら…分かつてゐるわね？」「は、はい…（ 。 。 川）」

レニアよりも最近はフランが脅威だけだ。

俺は早く帰る、と心に念じて魔法の森へと飛んで行った。

PM14:09

俺達は魔理沙の家に到着した。  
家から誰かと誰かの話声が聞こえて来る。

聞き覚えのある声だな……この声は

「「アリスか……」」

パチュリーさんと声が重なった。  
パチュリーさんは、アリスとは親しいのかな?

「あら。アリスを知ってるのかしら?」  
「はい。以前お世話をなつた人で」  
「そう」

パチュリーさんはドアノブを思い切り回して、一気にドアを開けた。

「おうパチュリー。丁度いい所に来たな……っ！」

「おっす魔理沙！遊びに来たぜ」

「お、おつ兄貴…来ててくれたんだな／＼／＼」

魔理沙の家は散らかっていて整つていらない状態だった。  
汚いな、とは思うが勝手に掃除するのは魔理沙に迷惑なのでやめて  
おいた。

「私達は遊び目的で来た訳じゃないけどね」

「あら、もん！久しぶりね」

「アリス、久しぶりだな」

アリスの顔を見るのは久しぶりに見える。  
一週間くらいは会つてなかつたような気がするが…

「前の約束、覚えてる？」

「ああ、また会つたら弾幕勝負…だっけ？」

「大体合つてるわ」

アリスは俺に小さく笑みを零す。

覚えていたことが、嬉しかつたんだろうな。

……

「突然だが、兄貴は魔法使えるか？」

魔理沙が突然、俺に問い合わせてきた。

魔法が使えるか否かと言われば使えるが…

魔理沙は何も能力云々を知らないから仕方ないか。

「もんは魔法使えるわよ。魔力は魔理沙の約5倍はあるし」

「「5、5倍…！…！？」」

アリスと魔理沙は口を揃えて驚愕している。

俺は1000000以上はあつたはずだから、驚くのも無理は無いな。

「魔力1000000ですつて…！？」

「あっ、兄貴。魔力1000000て人間か！？」

魔理沙にもお前人間かと疑われた。

俺、身体は普通の現代人だぞ（、；；）

「人間だよ。身体はね」

表情は落ち着いているが、心は少しだけ荒む。

能力だけはチートであつて、他の分野では人並みのレベルだと言つことをこの三人は分かつてるのかな…

「そりいえば、もんの能力を聞いて無かつたわね」

「お、今日の本題だな！パチュリー、兄貴の能力を頼む」

本題つて…

俺の能力を知る為だけに俺達を呼んだのか?  
まあ暇だからいいけど（、・・・・）

「…魔法と空間を操る程度の能力よ」

「空間？隙間が操れるのか？」

「多分操れると思う。一応、空間を斬ることも出来るよ」

「こんな能力、チート過ぎるわ…」

「返つていいじゃないか。兄貴の能力が強かつたら大きな力になる  
と思ってたんだし」

大きな力？

話が読めない…

理解出来ないまま、俺は三人の会話を黙つて聞いていた。

「んじゃ、行くつか。」

三人は話を終えた後、どこかに行く準備をし始めた。  
あの、こんな寒い日にどこ行くんですか。（、・・・・）

「どこに行くんだ？」

「魔界」

## 21話「魔法使い達の集い」（後書き）

魔界に行きます。

かなり遅ましたが、オリジナルキャラクターの紹介をしたいと思います（、・・・）

霧雨悶助  
きりさめもんすけ

1993年12月25日生まれ（15歳）

身長：165cm

体重：52kg

趣味：ネットと野球

血液型：B型

眼色：黒色

髪色：黄土色っぽい

備考

魔法と空間を操る程度の能力  
チート

魔力を1000000以上持つている

剣に目覚めた？

受験生の中学生。

両親は離婚、妹を突然無くし、ついには母親に公園に捨てられると  
言つ壯絶な幼少期を過ごした。

霧雨魔理沙の兄。

魔理沙は紫の神隠しにより4歳の頃に幻想入りした。

性格は優しく、怒ることは滅多に無い。

施設の女性に好かれていたようだが、本人は気付いていない。

裏表が無いのはまだ未明。

東雲戦しののめいくせん

4月22日生まれ

年齢：29歳

身長：178cm

体重：69kg

趣味：商売

眼色：青色

髪色：灰色

血液型：O型

備考

人里で商売をやっている。

悶助と仲がよい。

格闘の達人だとか何だとか

能力は不明。

調べればあるかもしぬれない

現在29歳独身の商売人。

主に西洋や洋風の商品を販売しており、経営は決して楽では無いようだ。

ルックスは普通にかっこいい。目元が少しキリッとしていて男らしい顔である。

女性には比較的モテるが、まだ結婚を考えていないうつだ。

性格は大胆で素直。喜ぶ時は喜び、悲しい時は悲しくなりと単純。

ムードメーカーでもある。

……

靈夢達は何かの施設に隙間から飛び降りた。

「何」「？」

「何かの施設みたいだな」

「あ、誰か来ますよ！」

「ん…お前ら誰だ？」

「奇抜な服装をしているな」

靈夢達の目に映つたのは、20代くらいの短髪の男と、40代くらいの…おっさんのが居た。

「おっさんとは何だ。まだまだ現役だぞ」「…あなた達は誰ですか？」  
「俺はレオ。レオと呼んでくれ」  
「俺はゴードンだ。ゴードンで頼む」  
「私は博麗靈夢よ。靈夢でいいわ。それで、何は何なの？」「付いて来い、案内してやる」

「何よ、このでっかい部屋は」

レミコアが、驚いた顔をするのも無理は無かつた。

タッチ操作で司令を下すと思われる機械にて、総員30人がコンピューターを使って何らかの管理をしている。  
宇宙戦争でもしてゐるのだろうか？  
まさか、ガンムの世界に入ったんじゃ……

「戦争でもしてゐの？」

靈夢ひの全員は、レオ達に問い合わせた。

「良く分かつたな。」「コードと言つ物質を取り合ひ……」「レオ、話すのは後だ。まずはあの人に靈夢達を会わせよ! いじやないか」「そうだな。んじゃ、付いて来い」

.....

「あなたは……靈夢と会つのね」

黄緑色のすりつとした髪を揺らす女性は、靈夢に話掛けた。  
黒ニーソを穿いていて、手元には書類を持つている。

「見ちやダメ」で何よ…（・・・）

「ええ。あなたは？」

「フィオナよ。この施設の管理者みたいなものね」

「要は一番偉いのね」

「まとめてくれてありがとう。今から、ここについて話すわ

PM13:45

「んじゃ、ここについて話すわね

「頼むわ」

「ここはマグメルって言つ民間軍事会社よ。主にボーダーを斡旋している所なの」

「ボーダーとは何故なにゆえでしょうか」

咲夜が、理解し難い顔で問い合わせる。

「ボーダーとは、ブلاスト・ランナーと言うロボットを操作する人のことよ。最近は、人手不足で困つて大募集中なの」  
「私達にも操作出来るんですか？」

ロボットと聞いて目を輝かせる早苗。  
すくなくして眩しいです。

「――コードと言つ物質に耐えられる身体なら大丈夫よ。検査してみる?」

「はい――」

「ちょっと早苗。何勝手に了承してんのよ」

「いいじゃないですか。しばらく帰れないんですし」

「山の巫女と同じく、検査してみたいわね。面白そうだし」

「しばらく帰れないんだし、この巫女の言うとおり検査すればいいじゃない」

永琳やレミコアは、プラスチックランナーに興味があるようだ。

他のメンバーも、特別興味が無い訳では無い顔だった。

靈夢は仕方無いわね、と仕方無しに了承した。

.....

「検査結果が出たわ」

「……」

早苗は未だに目を輝かせている。  
特に関心を持つていてる永琳とヒリコアは、やはり期待しているようだ。

「操作は出来る身体なんだけど…」  
ニードを摂取する必要の無い身體と言つのは特殊ね

「ニードって何？ 美味しいの？」

幽々子が、ニードを食べ物と勘違いしているようだ。

「美味しいわよ。強い毒を持つてるから」

「何だ、毒なんて摂取したら死ぬんじゃないのか？」

「ニード耐性者はニードを摂取しないと戦場で生きられないのよ」

「私達はニードを摂取しなくてもブلاスト・ランナーを操作出来るのでですね？」

「そう。あなた達みたいな人は初めて見たけどね」

「それよりも、ブلاスト・ランナーを見せて下さい…」

「いいわよ。ただ、一つお願いがあるの」

「…何よ？」

靈夢が眉間にシワを寄せ、フィオナを睨みつける。

「このマグメルに、社員として入って貰えるならいいわよ」

## 【番外編】東方×B.B. 2話（後書き）

「コードとは

自ら増殖性があり、資源枯渇問題の救世主とも言える素材。

B.B.は、この「コード」を巡ってG.R.E.と書つ組織とE.U.T.と書く組織が争いを繰り広げているのです。

つまり靈夢達が転移した時代は西暦2100年以降、となります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8802x/>

普通の現代人が幻想入り

2011年12月1日22時58分発行